

東京外国語大学 国際日本学研究プログラム—文部科学省「国立大学の機能強化」事業—

TUFS Program for Japan Studies in Global Context,
supported by Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology(MEXT)

東京外国語大学 国際日本学研究 報告Ⅶ

国際日本学がめざすもの： その多面性と可能性

大森恭子
朝日祥之
前田直子

ポーター・ジョン
スティーブン・ドッド

佐伯順子

東京外国語大学 大学院
国際日本学研究院

Institute of Japan Studies,
Tokyo University of Foreign Studies

— ごあいさつ —

東京外国語大学大学院国際日本学研究院では、2015年4月の研究院発足以来、国際日本研究の推進をめざして、シンポジウム、研究会、合同セミナー、報告会などの取り組みを行っています。国内外で日本研究を行っている研究者を本学にお招きして行っている連続講演会もそのひとつです。

2018年度は、「国際日本学がめざすもの：その多面性と可能性」という統一テーマのもと、2018年9月から2019年1月にかけて5回の講演会を行いました。この連続講演会は、2019年4月に本学の3つ目の学部として「国際日本学部」が発足するにあたり、この学部で取り組むことになる〈国際日本学〉の多彩な魅力を発信すべく企画したもので、各回において日本の文化・言語・教育・歴史・文学それぞれの分野から研究者をお招きして講演していただきました。学内外から研究者・学生・市民の皆様など多くの方々にご参加いただき、講演後の質疑応答では互いに議論を深めることができました。

第1回 2018年9月14日（金）

大森恭子氏（ハミルトン大学）

「サウンド・オブ・サイレンツ―無声映画と弁士の語り」

第2回 2018年10月19日（金）

朝日祥之氏（国立国語研究所／本学 NINJAL ユニット）

「多様化の進む地域社会における日本語を見つめる研究」

第3回 2018年11月30日（金）

前田直子氏（学習院大学）

「多文化・多言語共生社会における日本語教育研究」

第4回 2018年12月14日（金）

廣川和花氏（専修大学）、松沢祐作氏（慶應義塾大学）、ポーター・ジョン（本学）

「世界の中の日本地域史研究」

第5回 2019年1月17日（木）

佐伯順子氏（同志社大学）、スティーブン・ドッド氏（ロンドン大学 SOAS／本学 CAAS ユニット）

「世界文学としての三島由紀夫の創作」

この報告書は、それぞれの会にご講演くださった先生方から当日のご講演の内容を論文あるいは要旨の形でお寄せいただき「東京外国語大学 国際日本学研究 報告Ⅶ」としてまとめたものです。

本書の作成にあたり、ご協力くださった先生方に心より御礼を申し上げます。連続講演会および本書を通して、大学院国際日本学研究院のめざす〈国際日本学〉をめぐる研究および教育の発展にいくらかでも寄与できればと考えております。

2019年3月
東京外国語大学 大学院国際日本学研究院
研究院長 早津恵美子

Contents / 目次

ごあいさつ 早津恵美子

サウンド・オブ・サイレンツ―無声映画と弁士の語り
大森恭子 5

多様化の進む地域社会における、日本語を見つめる研究
朝日祥之 13

多文化・多言語共生社会における、日本語教育研究
前田直子 23

「世界の中の日本地域史研究」報告要旨
ポーター・ジョン(文責) 35

三島由紀夫作品における暗部の愉悅
スティーブン・ドッド 37

三島由紀夫の〈男性同盟〉と「男性同性愛者」としてのアイデンティティ
佐伯順子 42

サウンド・オブ・サイレンツ —無声映画と弁士の語り

大森恭子
(ハミルトン大学)

はじめに

本稿は、著者が2018年9月14日(金)に行った講演「サウンド・オブ・サイレンツ —無声映画と弁士の語り」の要旨をまとめたものである。なお、活動写真弁士(略して弁士、あるいは活弁)は、今から一世紀も前のサイレント映画時代に活躍し、トーキング・ピクチャー(トーキー)の登場とともに消えていったということから、過去の遺物という印象が強いかもしれない。そこで、講演の際には通常の学会発表とは趣向を変え、私たちが毎日の生活で見慣れているトピックと結びつけ、また簡単な「弁士体験」を行って、聴衆の興味を引きながら研究報告をする形をとった。

構成

- 1) 活動写真弁士(略して弁士、あるいは活弁)の役割
- 2) 弁士の歴史(サイレント映画時代、なぜ日本では弁士が必要とされ、人気があったのか)
- 3) 現代における弁士の活躍
- 4) 弁士資料を公開するデジタル・アーカイブの意義と用途

1. 活動写真弁士の機能と意味 — 活動写真弁士説明とは

映画は通常、「見る」という行為で表現されるものであり、「聞く」という動詞のみで映画鑑賞を表現することは特殊な事例に限られるであろう。しかし実際には、映画の音声は映画の物語世界の展開に極めて重大な役割を担うことも多い。

また、特に無声映画時代に関しては、その「無声」という名称から、映画鑑賞には音の介在がなかったと考えがちである。しかし実際にはこの時代の映画館こそ、弁士と楽士たちによる生の声や音楽が、観客の映画作品の解釈に重要な影響を与えた。そこで、講義の冒頭で弁士説明の役割と意味を、下記のような順序で述べた。

弁士の「活動写真説明」のスタイルや内容は、弁士によって、また時代や地方によっても千差万別であった。しかし大まかに言って、次の三つの機能を果たした。

- (1) 登場人物のセリフや音(映画の物語世界の中の音声)
- (2) 話の筋などを説明するナレーション(映画の物語世界の外の声だが、映画作品のナラティブに付随するもの)
- (3) コメンタリー(映画作品についての蘊蓄や、映画を見ている者の感情を表現)

セリフは、現代の声優のように複数の弁士が様々な声色を使った「声色掛合い」という例もあったが、一般的には声でリアルさを追求するというよりは、浄瑠璃の語りのように、弁士の地声で演じられることが多かった。（女性の登場人物のセリフは高めの声を出すということも行われた。）ナレーションは、映画のタイトルカードに出てくるテキストを読む（外国語のタイトルの場合は日本語に訳す）ことも、弁士が自己の解釈で内容を追加することもあった。コメントリーの内容は様々だが、外国の風習や俳優など、知っている映画がさらに面白くなる側面に言及することもあり、映画に対する観客の反応を代弁するかのよう感想を述べることもあった。いずれにせよ、弁士一人一人が、映画を自分なりに解釈して説明台本を用意し、本番に臨んだのである。そのため、同じ作品が複数の映画館で上映されるようになった時、観客の作品に対する理解や楽しみ方は各映画館の専属弁士によって大きな違いがあった。つまり弁士は、同一作品が映画館によってまるで異なる作品として解釈され得るという面白い現象を創出する一方、映画を芸術として育てていきたい者の視点からすると、新しい芸術様式の進化・発展を妨げる問題の根源と見なされたのである。

私たちの日常においても、映像に組み合わされた声の芸術は多数ある。講演では、アニメ声優、外国語映画の吹替え声優、スポーツ中継のアナウンサーの三つの例を挙げ、弁士との共通点や相違点をあげた。

- アニメの声優:キャラクターの「中の人」として、アニメを超えて人気となる。弁士の中にも、映画監督や俳優より人気のある者もあった。
- 外国映画の吹替え声優:声の調子、間合いの取り方、スピードなど、観客がわかる言語で声の演技をしてくれる。情報伝達が容易になるだけでなく、感動が倍増する点も弁士と共通点がある。
- スポーツの実況中継のアナウンサー:スポーツのルールなどを解説するのはもちろん、私たち観客がファインプレーを見て熱狂する時、その気持ちを代弁して盛り上げてくれる。また、選手たちのこれまでの苦労話などを紹介して人間的なドラマを作り上げ、スポーツ観戦に深みや広がりを与える。弁士の中にも、映画作品の文化的背景などを説明に織り込んで、立体的な物語世界を構築するものもあった。

このように、現代の声の芸と弁士には共通点もある。しかし、現代の声優やアナウンサーと弁士の大きな違いの一つは、弁士は映画館の舞台に立ったということである。ある程度の設備がそろっている映画館では、映画スクリーンの横に演壇のようなものがあり、弁士は映写機の明滅するほのかな光に照らされる形で説明を行った。合間には、オーケストラ・ピットの楽団が演奏を行った。映画上映中、観客は必ずしも弁士を注視していた訳ではない。しかし、客はどここの映画館でどの弁士が説明を行うかを広告などで把握して来ていたため、目当は弁士だったということも少なくなかった。スター弁士の一人であった徳川夢声も、調子の悪い日には上映中に客の罵声を浴び、うまくいくと賞賛の掛け声がかかったという。もう一点、弁士は通常、自分で作品を解釈して説明台本を書いていたことも現代の声優たちの役割とは異なるであろう。つまり、映画作品は弁士の説明をつける前にナラティブが完成したのとして世に出されているにもかかわらず、作品を自分なりに理解し、生の声を通してその解釈を提供する弁士の試みがうまくいった場合、映画にさらなる躍動感を与え、話に奥行きを与えると目されたのだ¹。

2. 弁士の歴史

ここでは1と多少重複するが、弁士の歴史を簡単に紹介する。

1 弁士が色々話してくれるため、サイレント時代の日本の映画界には、弁士がここで説明を入れるだろうと期待して映画を作っていた監督もいた。

映画到来とともに突然活動写真説明者が現れ、それまでになかった声の芸術を創りだしたわけではない。絵と声と共に使われる芸術は前近代も様々なものが挙げられるが、映画の直近では写し絵の伝統があり、それ以前にも絵解きや人形操りと共に行う人形浄瑠璃などが挙げられる。つまり、絵や映像、人形の動きに別の演者が声・言葉をつけるのは、日本の伝統芸能にその下地があった。

そういった下地もあって、サイレント映画の日本到来早々、日本の映画館ではスクリーンの横に説明者が登場した。初期には映画上映前に「前説明」を行って、作品の時代背景などの情報で観客の理解を助けることもあり、上映中には先述したナレーション、登場人物のセリフ、そして映画の内容や俳優についてのコメントをおこなうなど、様々な面で観客の理解を深めたり広がりをもたせたりした。音楽の生演奏がついた映画館も多数あった。弁士は、昭和元年（1926年）には全国で男性7264人、女性312人を数えたという（梶田 82-83）。しかしその後、減少の一途を辿る。東京府では、1927年末には男性が1717人、女性が94人いたが、1929年になると男性1201人、女性15人と減っていき、1930年半ばまでには消えていく。

日本映画・演劇の研究家、ジョゼフ・L・アンダーソン氏によると、弁士の説明の起源は、複数の媒体が混合した形態の舞台芸術であり、見どころ／聴かせどころは、語り手と舞台上のストーリーの間の緊張感に存在するとのことだ。つまり、物語の中の登場人物たちの間に生まれる緊張感や軋轢ではなく、語っている者と、舞台上で演じている者の演技の間に、生産的な緊張感が生まれるのが醍醐味だという。

他に、日本では昔から琵琶法師の語りもあり、江戸時代には講釈、明治になると講談と呼ばれる人気のお話芸もあった。したがって、講談師など、話芸を生業とした人の一部が、映画の到来とともに弁士になったのも自然な成り行きだったのである。

弁士の語りのスタイルがおおむね浄瑠璃の語りをはじめとする前近代の形式を受け継いでいることから、映画が進化するにつれて弁士は時代遅れとみなされるようになった面もある。しかし、映画技術の発達とともに映画のナラティブが変化していくのに合わせ、前説明を廃止したり、七五調で朗々と語る代わりに静かな口語体でミニマリストな説明を試みたりした弁士もいた。（例えば、徳川夢声はのちに、間の取り方が名人級だと言われるようになる。）

19世紀末に映画が発明されて以来、映画の技術は絶えず発達し続けた。映像をフィルムに焼き付け、映写機にかけることによって画像が動いているように見せる技術から始まった映画は、蓄音機というもう一つの技術を使って映画に音を後付けするといった試行錯誤ののち、1930年代に入ると、無声からトーキーへと本格的に移行した。

しかし、サイレントから発声映画への移行は、様々な理由で、はっきりした区切りの年がない。面白いことに、トーキーになっても弁士の説明付きで見たいという声もあったため、トーキーの音の上にかぶせる形で弁士が説明をしたり、せっかく入っている音を完全に消してしまい、弁士が説明するということがあった。また、各映画館の設備事情によっても、トーキーが上映できないため、弁士が付いた所もあった。溝口健二監督は、発声映画『折鶴お千』（1935）制作の際に、俳優たちの声ではなく、弁士説明プラス背景音楽のみを音として入れた。

3. 現代の弁士

トーキー映画が広まったのちもしばらく活躍を続けた弁士もおり、また弁士たちは複数の映画館でトーキーへの移行に際してストライキを行って抵抗したりもしたが、1930年半ばまでには弁士を雇い続ける映画館はなくなってしまふ。しかし、21世紀のこんにち、弁士として活躍する人達がほんの

一握りではあるが存在する。全国にいくつかの流れがあるが、その一つとしては、サイレント末期に少年弁士としてキャリアを積んだ松田春翠 (1925-87) が、散逸した古いフィルムを蒐集して第二次大戦後にマツダ映画社を創立、東京で弁士つきの無声映画鑑賞会を定期開催し続けた。春翠が収集し、保存した作品数はおよそ 1000 本である (不完全な作品を含む)。春翠没後、1973 年にデビューしていた弟子の澤登翠がその後を引き継ぎ、現在もプロの弁士として、毎月の無声映画鑑賞会に加え、日本国内外の映画祭や映画学関係のシンポジウムなどで活躍している。

澤登翠の弟子、片岡一郎 (1977-) も国内のみならず広く海外で活躍し、アメリカ、ドイツをはじめ、様々な大学や研究機関にも長期滞在で招待されて活動している。筆者も片岡氏とコラボレーション・ワークショップを行ったことがある。2014 年の 9 月に弁士 1 名、和楽器奏者 3 名 (琵琶、尺八、鳴り物)、カナダからピアノ奏者兼作曲家 1 名、フランスからチェロ奏者 1 名の総勢 6 名を、勤務大学であるハミルトン大学に招待し、1 週間ほどのワークショップを主催した。成果は、1925 年のサイレント、『雄呂血』(二川文太郎監督 阪東妻三郎主演) のための新しい弁士説明と音楽を生み出したことであり、2017 年 4 月には米国カリフォルニア州ロスアンゼルス、UCLA (カリフォルニア州立大学ロスアンゼルス校) のビリー・ワイルダー・シアターにてワールド・プレミアを行った。この『雄呂血』の企画が発端となり、2019 年 3 月には再度、弁士関連のイベントが UCLA で開催された。これは片岡一郎、坂本頼光、大森くみこの 3 名が弁士として参加、和洋楽器の演奏とともに日米のサイレント映画 15 本をビリー・ワイルダー・シアターで 3 日間に亘って上映するというものであった。大入り満員の劇場で、観客が映画に反応して笑ったりしみりとしたりしていた。また、同じ映画を複数の弁士が競演したり声色掛け合いをした作品では、弁士や楽士の絶妙のパフォーマンスに感嘆のため息を漏らし、まさにサイレント時代の映画館体験が再現されたかのような企画であった。20 世紀初頭には、日本人移民がロスアンゼルスの日本人街の映画館で弁士付きの映画を楽しんだ歴史を考えると、感慨深いものがある。

なお、UCLA での公演では、日本語が堪能な客はおそらく少数だと思われたため、UCLA と早稲田大学の方々が弁士の説明台本を上映直前に受け取って英訳し、それを上映時にソフトタイトルとして映画に重ねて映写するという工夫が凝らされた。公演後に観客の数名と話をしたところ、日本語がわからなくても弁士の声のパフォーマンスから感情が伝わってきて非常に感動したという答えが圧倒的であった。同時に、英訳があったおかげで、同一作品でも弁士の説明が一人一人どのように異なるかという比較を堪能できたのも面白かったという声が聞かれた。

4. 弁士資料を公開するデジタル・アーカイブの意義と用途

2017 年と 2019 年にビリー・ワイルダー・シアターの上映会に来場した人たちは、弁士説明を実体験できた。また、日本国内でも弁士つきの無声映画上映会が各地で開催されている。それでも、そのような場に行くことが叶わない人の方が圧倒的に多い。松田春翠や澤登翠の弁士説明が音声として入った無声映画の DVD シリーズがデジタル・ミーム社から出ているので、それで弁士の声の芸を楽しむことも可能である。しかし、もっと広く弁士について知識を広め、体験してもらうにはどうすれば良いのだろうか。そのような思いから、著者はここ数年、弁士のデジタル・アーカイブづくりに着手している。

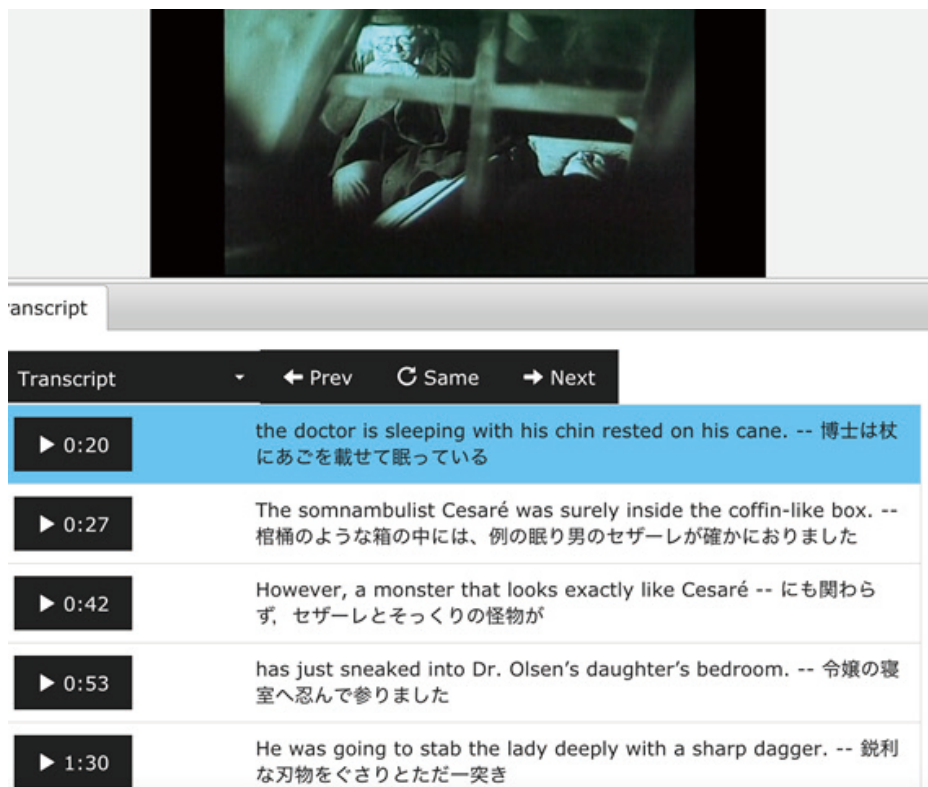
9 月の講演では、そのアーカイブからいくつかの例をお見せした。一例としては、ドイツの表現主義映画『カリガリ博士』(1920) が、アメリカ上映と日本上映時にどのような違いをもって受容されたかということをお話しし、徳川夢声の説明の音声データと映画の映像を同期化したものを 1 シーン、お見せした。

このアーカイブは現在、作業を継続中であるが、公開可能になるまでの情報提供のために情報サ

イトを設けている。このサイトも順次更新中である。<https://www.hamilton.edu/academics/centers/digital-humanities-initiative/projects/Benshi-Silent-Film-Narrators-in-Japan>

アーカイブには、4つの目標がある。第1点目は、サイレント時代などの印刷物（映画館のプログラム、チラシ、広告、エッセイ、映画雑誌に掲載された映画説明や梗概、イラストなど）、レコード、弁士番付、写真、映画館に関する資料（写真、設計図）など、いわゆるエフェメラ（ephemera）をこのアーカイブでデジタル保存し、誰でもアクセスできるようにしたい。

第2点目は、第二次大戦以前のレコードや、第二次大戦後の回顧上映会などのテープ録音をデジタル化し、さらにその音声を無声映画の映像と同期化（シンクロ）させることである。弁士説明のテキストとその英訳が、映画のシーンが再生されるにつれて順次、スクローリングで出てくるようになっている。ここでは、同じ映画に対して複数の弁士がどのように異なった説明をするかを比較することもできる予定である。



The screenshot shows a video player with a transcript overlay. The video frame displays a scene with a person lying down, possibly a doctor, with a cane. The transcript is as follows:

| Transcript | ← Prev | ↻ Same | → Next |
|------------|---|--------|--------|
| ▶ 0:20 | the doctor is sleeping with his chin rested on his cane. -- 博士は杖にあごを載せて眠っている | | |
| ▶ 0:27 | The somnambulist Cesaré was surely inside the coffin-like box. -- 棺桶のような箱の中には、例の眠り男のセザーレが確かにおりました | | |
| ▶ 0:42 | However, a monster that looks exactly like Cesaré -- にも関わらず、セザーレとそっくりの怪物が | | |
| ▶ 0:53 | has just sneaked into Dr. Olsen's daughter's bedroom. -- 令嬢の寝室へ忍んで参りました | | |
| ▶ 1:30 | He was going to stab the lady deeply with a sharp dagger. -- 鋭利な刃物をぐさりとただ一突き | | |

第3点目は、映画上映と弁士説明が行われた場としての映画館の空間の再現を目指している。現時点では、赤坂溜池の葵館と新宿武蔵野館（いずれも東京）の写真、設計図、随筆などを使用し、バーチャル・リアリティー（VR）モデルを作成した。これによって、徳川夢声の説明が武蔵館の3階バルコニー席からはどう聞こえるか、スクリーンの大きさはどのくらいか、などを再現できる。



COMPARATIVE JAPANESE FILM ARCHIVE

Click to Begin

THE COMPARATIVE JAPANESE FILM ARCHIVE
Project Director: Toyoko Okano, Ph.D.
Associate Professor of Japanese and Chair of East Asian Languages and Cultures

ABOUT THE THEATRE
Originally opened in 1922, the Masamichi Theatre is the largest theatre in Japan. It is a high-class theatre building. The theatre is a masterpiece of modern architecture.

第4点目は、弁士アーカイブの教育的活用である。特に筆者の勤務校はリベラル・アーツ大学で、学部学生のみを教えている。そのため、大学院のように高度に専門的なことを研究させるのではなく、弁士の役割を現代に応用して、語りについて考察するといった用途にこのアーカイブを使用している。数年前には学生が弁士の基本情報サイトを作ったが、今年の学生もそれを見ながら弁士について学び、次には実際に弁士説明を行ってみるという作業をしている。また、大学近隣にある難民センターでおこなわれた英語の授業をテーマにした『クロスロード・イン・コンテクスト』というサイレント映画も、2年前に学生と共同制作した。そして出来上がった映画に他の学生たちが弁士説明をつけるという経験を通して、他人の物語を語るとはどういう意味を持つか、ということを考える機会としている。

このように、デジタル・アーカイブの利点は多数あるが、これからも順次発展させて行くことが可能で、また遠隔地にいる他の研究者たちと共同研究ができることも強みである。例えば、筆者は無声映画時代の映画音楽は専門外であるが、このアーカイブを共同作業の場として使い、優れた映画音楽研究者たちの研究成果を載せて行くことも可能であり、弁士と楽士がどのように共存していたのかということも探っていけるかもしれない。

活動写真弁士とは遠い昔の芸だと思われるかもしれないが、近年、さまざまな場で21世紀に弁士を考察し、体験する意義を考えさせられる機会がある。これからも他の研究者や教え子たちと協力し、研究を進めてゆきたい。

なお、下の参考文献は、これまで著者が研究に利用したものの、ほんの一部に過ぎない。文献としては日本語のものが圧倒的多数であるが、今回は英語での出版物を紹介するため、意図的に英語圏の出版を主に選択したことをお断りしておく。

参考文献

- The Benshi – Japanese Silent Film Narrators* (2001) by Friends of Silent Films Association and Matsuda Film Productions. Tokyo: Urban Connections. Print.
- Bernardi, J. (2001) *Writing in Light: The Silent Scenario and the Japanese Pure Film Movement*. Detroit, MI: Wayne State UP. Print.
- Dym, J. (2003) *Benshi, Japanese Silent Film Narrators, and Their Forgotten Narrative Art of Setsumei*. Lewiston, NY: The Edwin Mellen Press. Print.
- Fujiki, H. (2006) “Benshi as Stars: The Irony of the Popularity and Respectability of Voice Performers in Japanese Cinema.” *Cinema Journal* 45.2: 68-84. Online.
- Gerow, A. (2001) “The Word before the Image: Criticism, the Screenplay, and the Regulation of Meaning in Prewar Japanese Film Culture.” *Word and Image in Japanese Cinema*. Eds. by Washburn, D. and Cavanaugh, C. Cambridge: Cambridge UP. Print.
- Gerow, A. (2010) *Visions of Japanese Modernity: Articulations of Cinema, Nation, and Spectatorship, 1895-1925*. Berkeley: University of California Press. Print.
- Kajita, A. (2011) “Yōga no dendō Shinjuku Musashino-kan,” *Yōga no dendō Shinjuku Musashino-kan*. Tokyo: Kaihat-susha. Print. 82-83.
- Komatsu, H. (1997) “Japan: Before the Great Kanto Earthquake.” *The Oxford History of World Cinema*. Ed. by Newell-Smith, G. Oxford: Oxford UP. Print. 177-182.
- Misono, K. (1990) *Katsuben-jidai*. Tokyo: Iwanami Shoten. Print.
- Nornes, M. (2007) *Cinema Babel: Translating Global Cinema*. Minneapolis: U of Minnesota Press. Print.

The Sound of Silents: Silent Film and Benshis' Oral Performance

Kyoko OMORI
(Hamilton College)

The lecture I gave in September of 2018 focused on *benshi*, the lecturers/explainers/narrators at silent film theaters in Japan. I discussed the following four points:

- Functions and Roles of *Benshi*
- History of *Benshi*
- *Benshi* in Today's World
- "*Benshi*: Silent Film Narrators in Japan" Digital Archive

A close study of *benshi* oral performance alongside film screenings and its surrounding popular cultural productions show us how a transitory, vernacular mode of cultural entertainment generated an intricate web of other popular cultural forms such as phonograph records, radio shows, printed *benshi* narrations, and even literary works. Collectively, this multi-media assemblage helped to cultivate new habits of listening and other forms of enjoyment in response to the transforming sensory environment of modernity during the early twentieth century. In the last portion of my lecture, I showed parts of my digital archive that uses digital tools such as VR and GPS to gain further insight into the ways that *benshi* performers engaged in a dynamic, multisensory, and inter-media performance as a part of introducing film to Japanese audiences.

多様化の進む地域社会における 日本語を見つめる研究

朝日祥之

(国立国語研究所／東京外国語大学 NINJAL ユニット)

1. はじめに

戦後の日本社会の中でも特に大都市部への人口流入、日本に住む外国人の増加により多様化が進んでいる。この多様化の進む社会で日本語がどのように使用されているのか。その日本語が今後の日本社会でどのように変容していくのであろうか。本稿では、この日本語が変容してきた過程をさまざまな側面から捉え、今後ますます多様化が進む日本社会における日本語の将来像について考察する。

以下では、2節で多様化する日本社会の様子を統計資料から説明した上で、その多様化がもたらす社会言語学的意味について考察する。その後、3節で多言語化現象に着目した研究を具体的事例とともに示す。それを踏まえ、4節で多様化の進む日本社会における日本語の将来像とその研究のあり方について考えを述べる。

2. 統計資料からみた日本社会の多様化

最初に、統計資料から日本社会の多様化の様子を紹介する。もちろん、複数の構成員より構成される社会には個別性があり、多様性が伴う。例えば、東京都のような大都市であろうと地方都市であろうと一定規模の人が生活しているわけで、その地域ならではの特性やそこに住む人たちの個性も異なる。本稿でいう「多様化」はそのような特定の地点において旧来から生活する人たちを構成する要素の多様性ではない。むしろなんらかの理由により、他地域からの移動によって形成される「多様化」である。本節ではこれに関する統計資料を示しながら、その「多様化」のあり方に関して考察を加える。

まず、表1に1959年から2017年における他道府県から東京都への転出入者数を示す。2017年時点では転入者の方が転出者よりも多いことがわかるが、この数はそのピークのあった昭和40年(1965年)からすると少ない。また、東京都に居住している外国人数を図1から見ると、全体的な傾向として、中国の在留者が最も多く、それに韓国、フィリピン、ベトナム、ネパールへと続いている。この2つの図表から東京への人口流入は継続しており、その多様化が進んでいることがわかる。

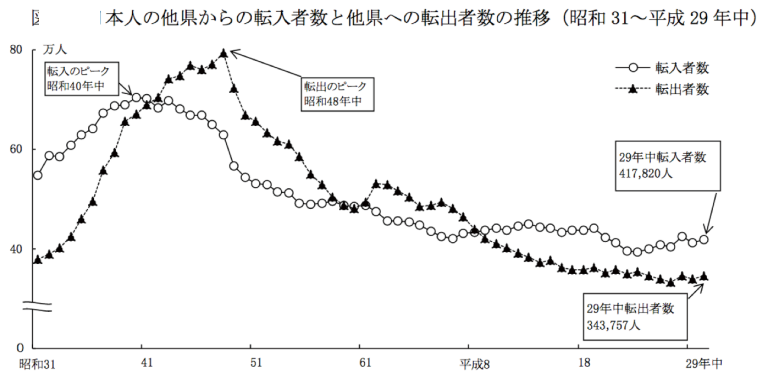


表1 東京都への転出入者数の推移（東京都 2018）

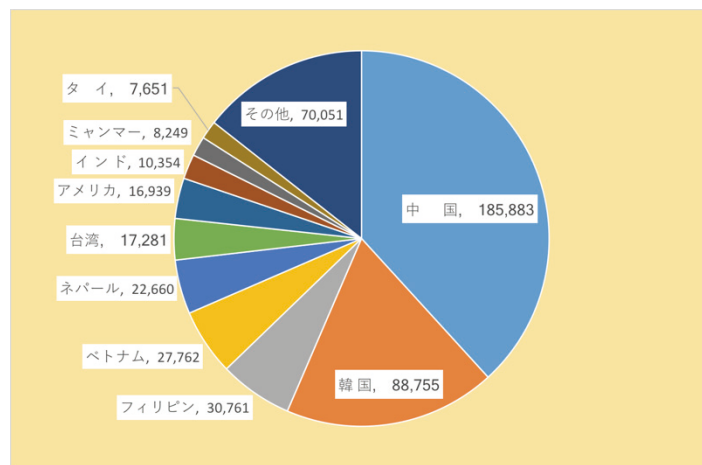


図1 東京都に居住する外国人数（国別）（東京都 2018）

次に図2と図3である。図2が日本人、図3は外国人の東京都区・市部各地域に転入した人の数である（東京都 2018）。いずれの場合にも東京都区内の周辺地域への転入が多いことがわかる。

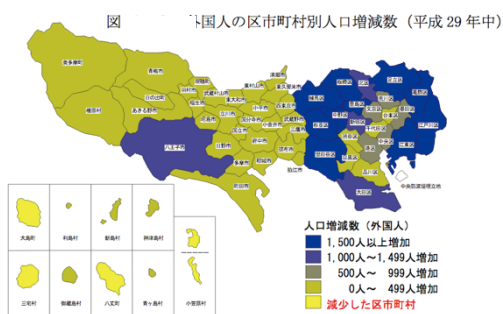


図2 東京都各地区への日本人の転入

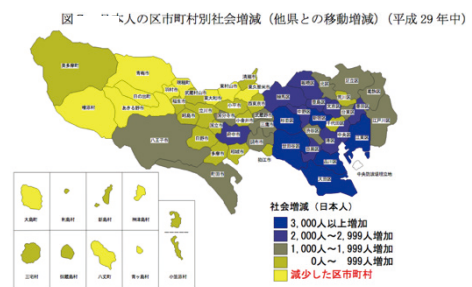


図3 東京都各地区への外国人の転入

ここから東京都への人の移動は、国内外の地域の人たちによってもたらされていることがわかる。この傾向はもちろん大都市に顕著なものである。ただしこれが地方都市で生じていないということではない。程度の違いはあるが、このような意味でも「多様化」は生じているのである。

では、ここでいう「多様化」は言語研究を行う上でどのように関わるのであろうか。筆者は次の3点に研究課題が設定できると考える。

- (1) 異なる日本語方言話者の流入（日本語方言間の接触）
- (2) 異なる言語話者の流入（言語間の接触）
- (3) 異なる社会背景を持つ話者の流入（ジェンダー・手話など）

これらの研究に対してどのようなアプローチがあるかという点

- (1) 現象学的なミクロレベルのアプローチ
- (2) 社会学的なマクロレベルのアプローチ
- (3) 統合的・包括的なアプローチ

が考えられる。これまでの社会言語学・言語社会学的研究の多くは(1)と(2)を扱ってきたが、(1)と(2)をつなぐような(3)のようなアプローチを採用する必要もある。

3. 多言語化の解明に取り組む研究

さて、前節で示した研究アプローチを踏まえ、本稿では多言語・多方言社会としての日本語社会を事例として考察していく。なお、多様化を支える重要な概念として、例えば生活者のジェンダーや社会階層の問題、また外国人らによる日本語の言語行動に見られる現象などを挙げることも可能であるが、紙幅の関係上、割愛する。

以下、日本語社会の多言語化・多方言化に見られる現象や課題について、具体例を示しつつ考察する。

3.1. 多言語・多方言社会としての日本語社会

ここでは多言語化・多方言化していく日本語社会を見ていく。日本語社会において、多言語が使用されるようになることと、多方言が使用されるようになることとは、その背景についても、その社会的意味も異なる。その意味では双方を同じように扱うことに限界点もあるかもしれない。以下では、それぞれに見られる現象を言語景観を中心としながら3.2節、3.3節で説明を行う。

3.2. 多言語化する日本語社会

日本における多言語化が指摘されるようになったのは1990年代以降と考えられる。言語景観についてはすでに研究書の刊行（庄司・クルマス・バックハウス 2009 など）もなされている。関西地方を拠点にした多言語化現象研究会や東京を拠点にした多言語社会研究会などの活動にも見るように、研究会も発足されているほどである。その意味では本稿で扱うテーマはすでに学術研究の蓄積を得ていると言ってよい。本稿では、これらの研究で指摘されている詳細を包括的に扱うよりも、多様化が進んだ日本語社会の一つの側面としての多言語化がどのような形で表象されているのかに焦点を絞って見ることとする。

日本における公共表示は多くの場合、「日本語・英語・中国語・韓国語」の場合が多い。図4は都内の私鉄鉄道の駅の掲示であるが、これらの4言語による表示である。なお、ここでいう「中国語」は多くの場合、簡体字による表示を言う。



図4 都内における公共表示（筆者撮影）

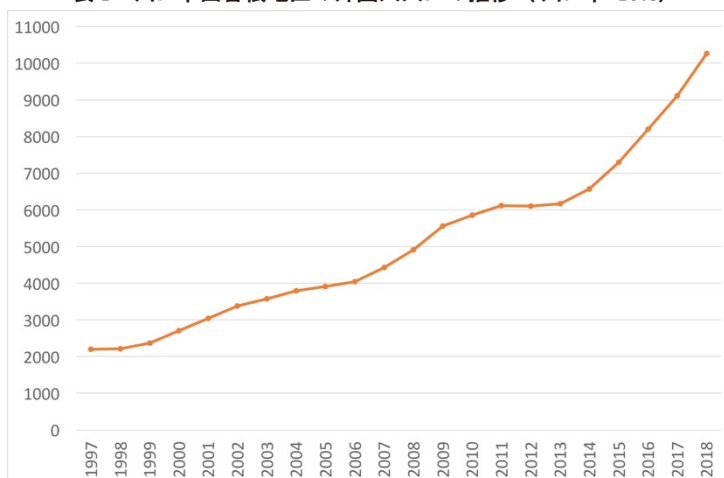


図5 北海道におけるキリル文字による表示（筆者撮影）

また、これにとどまらない例もある。図5は北海道稚内市で撮影されたものである。これには、日本語とラテン文字による表示の他にキリル文字による表示がある（朝日 2011）。

なお、言語景観を通じて、まさに進行中の多言語化現象を捉えることもできる。例えば、近年中国人居住者が急増していると言われる川口市西曾根地区における多言語化現象である。当該地区における外国人の人口は、川口市による統計資料によると表2となる。

表2 川口市西曾根地区の外国人人口の推移（川口市 2018）



この地区では1997年末から2018年にかけて外国人居住者が5倍に増加したのである。このことは言語景観にも見られる。図6と図7は当該地区で撮影されたものである(岡田2018)。



図6 ゴミ掲示の言語使用



図7 不動産会社のチラシ

この他にも、いわゆるエスニックメディアと呼ばれる媒体にも見られる(図8参照)。これらは日本国内で当該エスニックグループのメンバーに発信されるものである。2010年頃までは紙媒体のメディアが主流であったが、情報通信機器の普及により、スマートフォンのアプリにおける多言語による情報提供がなされるようになった(図9参照)。



図8 エスニックメディアの例(ベトナム語)

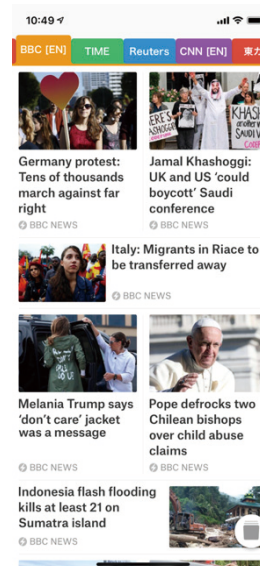


図9 アプリのチャンネル(英語)

このように、日本語社会における多言語化現象は、公的・私的空間双方に広く観察されるものである。まさに日本の言語生活における多様化が広まったと言えよう。

一方、日本における多言語化が生じたことに連動して行った「多様化」について触れておきたい。日本語社会における多言語化の一つとしてあった「他言語を使用する」ということではなく、「より平

易で分かりやすい」日本語、つまり「やさしい日本語」を使用することである。「やさしい日本語」が提唱されるようになったのは、いわゆる阪神・淡路大震災時に避難所で必要とされる情報が外国人には十分に伝わらなかったことがきっかけであった。弘前大学人文学部社会言語学研究室(2017)は、減災を目的とした「やさしい日本語」の作成にあたっている。これによれば、「やさしい日本語」の作り方として例えば次のような指針を提唱している。

- (1) 難しいことばを避け、簡単な語を使ってください
- (2) 1文を短くして文の構造を簡単にします。文は分かち書きにしてことばのまとまりを認識しやすくしてください
- (3) 災害時によく使われることば、知っておいた方がよいと思われることばはそのまま使ってください
- (4) カタカナ・外来語はなるべく使わないでください
- (5) ローマ字は使わないでください
- (6) 擬態語や擬音語は使わないでください
- (7) 時間や年月日を外国人にも伝わる表記にしてください
- (8) 二重否定の表現は避けてください

このような指針をもとに「やさしい日本語」にしたのが次の例文である。

【元の指示】

「けさ7時21分頃、東北地方を中心に広い範囲で強い地震がありました。大きな地震のあとには必ず余震があります。引き続き厳重に注意してください。」

【やさしい日本語】

「今日 朝 7時21分、東北地方で 大きい 地震が ありました。大きい 地震の 後には 余震 <後から 来る 地震> が あります。気をつけて ください。」

「やさしい日本語」の作成をめぐるのは、実際の現場でどのように用いられ、それがどのような効果をもたらすのかについてはさらなる研究が必要である。公共放送における緊急情報の伝達のあり方も含めた上で、検討がなされるべきであろう。

3.3. 多方言化する日本語社会

日本語社会の「多様化」を支えるもう一つの柱である「多方言化」を取り上げる。全国共通語化により、方言の消失が懸念されるようになり、全国各地で「消滅危機方言」研究が盛んである。旧来の地域社会に根ざしてきた「伝統的」方言の持つ多様性を記述言語学的・言語類型論的アプローチで記述するのが主たるアプローチである。その研究の果たす役割は大きい。

その一方で、その地域で「方言がなくなるか」と問われればどうであろうか。おそらく当該地域の話者たちにとっての「地域性」がある限り、それと関連づける形で使用している言葉には地域的な特徴が「伝統的なもの」から変容される形で継承されつつ、新たな言語形式を生み出したり、新たな意味機能を既存の言語形式に付与させたりしながら存在するはずである。その意味でも方言は形を変えながらも存在するであろう。

その方言を使う若者や社会活躍層のほとんどは自らの地域で人生を過ごしたとしても、近隣の地域や、主要地方都市、東京や大阪に出かけていくことがあるだろう。沖縄の人が毎週、仕事の関係で東京に移動したり、東京に自宅のある人が勤務先のある大阪の会社に平日だけ通い、週末になると東京に戻るようなことも日常的に起こっている。そうした地域の「方言話者」が日本各地を往来するのが現代社会の日本語社会である。このように考えると日本語社会が「多方言化」するのも自然なことである。例えば東京の山手線の中で関西弁や博多弁、津軽弁を使いながら話す人がいてもおかしくないのである。

一方で、このような「多方言化」は「多言語化」ほど容易に可視化されるものでもない。「多言語化」は情報受信者を配慮した形で情報発信者が他の言語を使用するために行われるものであり、実際、他言語の文字体系を使用した形で掲示することが求められる。例えば東京都が他言語による情報発信はまさにこれに該当する。

「多方言化」が観察されるのは、現時点では三つの状況であると考えられる。

一つ目は、ソーシャルネットワーク内におけるコミュニケーションである。電子メールやLINE、Twitter、Facebookなどの場での情報発信、それに対するリアクションなどで方言が使用される傾向がある。表3は二階堂(2009)で示された例である。福岡の大学に通う鹿児島県出身の学生と長崎県出身の学生のやりとりである。

表3 福岡の大学に通う学生のメールのやり取り

A: やっほい B (相手の名前) ポーリング 行くって言ったけ?
 B: 行きたい もうポーリングの予約とととと?
 A: とととと 何 笑 お菓子みたい 予約まだしてない ぽいよ 人数決まってないし
 B: 人数集まってないんだ じゃあ、Qちゃんも、誘っとくばい
 A: Bは行くんよね? 笑 急にQちゃん出てきたよね 笑
 B: うん 行くばい Qちゃん、この間、ポーリング行きたいって言いよったけんが
 A: まじで? Qちゃん ポーリングのイメージないわ 笑 R君達も行くのけ?
 B: そう? やる気満々やったばい R君達も行きたいって言いよったばい
 A: まじで? 沢山の方が楽しいしね じゃあ Sに言っとくね Tにも誘ってよか? 暇らしい 笑
 B: いいよ 沢山の方が盛り上がるけんね どのポーリング場に行く予定なん?
 A: X (場所の名) とか言ってたけど 何かU が幹事するっぽい 大丈夫け? 笑
 B: Xかあ 良いばい Uが幹事か 心配なんやけど
 A: だからよ 笑 まあ超 張り切っているし 応援しよう とにかく楽しみだし
 B: だね また、詳しいことが決まったらメールしてね 今から、Aちゃんの家にくっけん
 A: まじかよ メールしてる意味ないし 笑 つか ちょい5時まで用事あるから待ってて
 B: 分かったばい 来る前にメールすっけんね
 A: あたしが 帰ったら電話するよ またいろいろ語るが。
 B: 語ろう @ まつとるけんね
 A: はあい

二人は福岡市に居住している学生である。当然のことながら、福岡市の方言を目標言語として習得している段階であることが想定される。にもかかわらず、鹿児島県出身者の学生(A)も長崎県出身の学生(B)も出身の方言を使い続けるのである。お互いの言葉遣いの違いを修正しようと相手の言い方に合わせるようなアコモデーション(Giles 1973)などは行わない。このようないわゆるノン・アコモデーションがソーシャルネットワークサービスで生じている「多方言化」なのだと判断できる。なお、ノン・アコモデーションが生じる時にあるような、お互いの言葉遣いの違いを乗り越えないという意味ではないことは断っておく。

二つ目は、いわゆるローカリズムの表象としての方言使用である。公共の場で方言を使用した掲示を行うものである。これはその地域への訪問者や観光客に地域色を醸し出す効果があるものである。例えば、図10、図11などはそれぞれ名古屋、神戸で使われているものである。それぞれ地域を代表する方言形(例:連母音の融母音化「ミャー」やアスペクト「トー」)の使用が認められる。



図10 「名古屋ことば」自販機



図11 神戸方言「ト」の使用(神戸市内の駅にて)

その一方で方言を使用するものの、その発信先はその方言話者に限定されてしまう例を紹介したい。次の例は青森県警察が募集した方言標語の内、優秀作とされたものである。

- (1) おがしげだ 電話葉書は かまいしな
- (2) な、だだば 通じなければ 偽息子

この他にも青森県内掲示に方言を使用した例が認められる。図12や図13などはその例である。先の標語も含め、この掲示を見てその意味がわかる青森県外者は多くはないであろう。

では、なぜこのような現象が生じるのであろうか。おそらくいわゆる「方言回帰」が生じているのではないかと考えられる。近年、特に公的な場で共通語が広く使用されるようになり、方言が使用されなくなった状況にあると考えられる。その反動で方言を使用することが公的な場でも求められるようになったのではないか。その例の一つがこの方言使用の標語であると考えられる。



図12 交通安全を訴える「思いやり俳句」(青森県)

三つ目はいわゆる「方言コスプレ」と呼ばれる現象である。実際に方言を使用するというわけではなく、漫画や映画などに登場する人物のキャラクターと方言の持つイメージを合わせたものである。様々な方言をセリフに取り込むことで、共通語では表現できないキャラクターを形成することが可能となる。図13は「花のズボラ飯」である(図は田中(2011)より引用)。このようなレベルで「多方言化」が進んでいると考えられる。

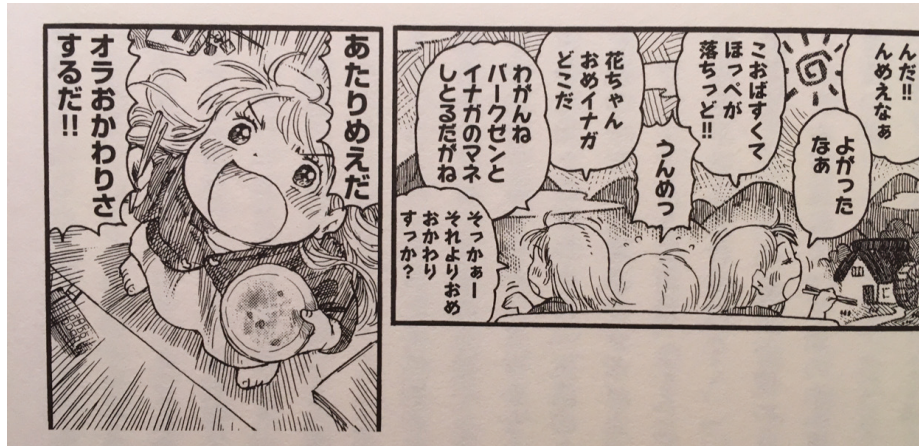


図13 「花のズボラ飯」における方言使用

4. 多様化の進む日本社会における日本語の将来像

本稿では、日本社会における多言語化ならびに多方言化現象から、日本語社会の多様化の様相のある側面について考察した。本稿で示した点で共通しているのは、人の移動により、日本語社会の多様化がますます進んでいるということである。日本社会の多言語化は単なる日本語学習者・日本語教育・多文化共生の問題ではなく、日本語社会全体として、この現象をどのように捉えていくのか、検討すべき時が来たと思われる。近年、例えば、ロンドン英語の研究で非母語話者のロンドン英語の特徴を分析するような、大都市における外国人がホスト社会の言語をどのように獲得するのか、という研究が進められている。実際、ロンドンの人口の約半分が非母語話者なのである。このような状況が日本語社会にいつやってくるのかはまだわからない。だが、多様化が進んでいく先には、ロンドンのような状況が例えば東京に生じることも考えておいてもよいだろう。

また、人口の流動化がますます高くなる日本語社会における共通語の特徴、各地の方言の変容も継続して観察すべきである。方言の役割も20世紀におけるそれとは変化した。方言に置かれた新たな役割をどのようにして捉えていくのか、検討が必要であろう。

いずれにせよ、日本語社会で生じる様々な現象があることには、変わりはない。このようなテーマに関心を持つ研究者・大学院生が一人でも多く生まれ、日本語研究における今日的・将来的課題をあぶり出しつつ調査研究が推進されることを願うばかりである。

参考文献

- 朝日祥之 (2011)「北の外れ」言語景観の対照：北海道とサハリンを事例に」中井精一・ダニエル＝ロング編『世界の言語景観・日本の言語景観景色のなかのこぼれ』桂書房 pp.96-109
- 岡田素子 (2018)「西川口駅西口のチャイナタウン化について」東京外国語大学大学院社会言語学概論レポート
- 川口市 (2018)「川口市統計書」ウェブサイト <https://www.city.kawaguchi.lg.jp/soshiki/01020/010/toukei/13/>
- 庄司博史・フロリアン＝クルマス・ペーター＝バックハウス (2009)『日本の言語景観』三元社
- 田中ゆかり (2011)『「方言コスプレ」の時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店
- 東京都 (2018)「東京都の統計」ウェブサイト <http://www.toukei.metro.tokyo.jp/>
- 二階堂整 (2009)「福岡の大学生の携帯メールにおける方言使用」『山口国文』32巻 pp.167-176
- 弘前大学人文学部社会言語学室 (2017)「減災のための『やさしい日本語』」ウェブサイト <http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/kokugo/EJ1a.htm>
- Giles, Howard (1973) Accent Mobility: A Model and Some Data. *Anthropological Linguistics*, Vol.15, Nov.2, pp.87-105.A

Documenting Japanese language in highly diverse Japanese societies

Yoshiyuki ASAHI
(NINJAL/TUFS)

In post-war Japan, urbanization, influx of Japanese residents from all over the country into large cities, and a rapid increase of foreign residents in Japan have impacted Japanese language in a more diverse way than ever before. Sociolinguistic, Japanese linguistics and Japanese as a second language studies have been conducted to struggle with the relevant issues. Nevertheless, no comprehensive accounts have been proposed to document this varying social facet of Japanese language. This trend is expected to proceed more in the future. Therefore, scholars in the above mentioned disciplines are strongly expected to discuss, plan, and conduct any incubation, feasibility, and empirical studies to develop the research framework and to suggest any potential future research topics.

In order to elucidate the topics to tackle with this situation, this paper firstly began a brief description of how Japanese society has become highly diverse with a close look at some statistics on influx of Japanese outside Tokyo and also that of foreigners. This paper, secondly, illustrated some studies such as linguistic landscape, ethnic media, use of dialect in social network and *manga*, to show that multilingualism as well as multidialectism play their role in the Japanese society. Lastly, this paper renders an insight on what Japanese language will and should be like in the future.

多文化・多言語共生社会における 日本語教育研究

前田直子
(学習院大学)

目次

1. はじめに
2. 日本語教育と日本語研究の多様性
 - 2.1. 日本語教育における多様性
 - 2.2. 日本語研究における多様性
3. 文法研究には何が出来る？
 - 3.1. 文法研究に求められること
 - 3.2. 文法の「スパイラル」な教え方
4. ケーススタディ (1) — 授受表現の教え方
 - 4.1. 日本語の授受表現の特殊性
 - 4.2. 授受表現の教え方
 - 4.2.1. 本動詞の場合
 - 4.2.2. 補助動詞の場合
 - 4.2.3. 授受表現のスパイラルな教え方
5. ケーススタディ (2) — 移動場所を表わす「へ」と「に」
 - 5.1. 「へ」と「に」の相違点
 - 5.2. 新聞1面見出しにおける「へ」と「に」
 - 5.3. 「へ」と「に」のスパイラルな教え方
6. おわりに

1. はじめに

現代社会のキーワードである「多文化・多言語共生社会」は、日本語教育の世界でも大きく注目される概念となっている。こうした社会における「ことば」の研究、特に「文法研究」は、日本語教育のためにどのような言語研究ができるのだろうか。本稿は、とくに学習者が目標とする学習レベルの「多様性」に配慮した文法研究と文法教育について、具体例を通して考えることを目的とする。

2. 日本語教育と日本語研究の多様性

2.1. 日本語教育における多様性

応用分野でもある日本語教育は、もともと多様性を持った領域であった。まずは、日本語を教える教師の多様性があり、日本語教育の世界にはさまざまな背景を持つ教師がいる。「日本語」研究の領域から日本語教育の世界に入った教師だけでなく、日本語以外の「日本」研究から、あるいは日本語以外の「言語」研究から日本語教育の世界に入った教師もあり、また「教育」や異文化交流・異文化コミュニケーションへの関心から日本語教育に携わるようになった教師もいる。

毎年、多くの「教材」が出版され、また様々な「教育方法」も研究・発表されている。

日本語学習の「目標」もさまざまである。日本語が「わかる」こと、「できる」こと、そして現代は「つながる」にあるとするものもある（當作 2013：88-97）。

こうした多様性の中で、日本語教育の実践に最も大きな影響を与えるのは「学習者」の多様化・多様性であり、その背景は、以前は「国際化」と呼ばれ、現在は「グローバル化」と呼ばれる世界的な潮流である。留学生、ビジネス関係者、研修生・技術実習生に加え、多種多様な職業に関わる「外国人」、そしてその家族（配偶者、子供たち）が、現在の日本語教育の対象者であり、それに応じて教材や教育方法、教育目標も多様化するのとは当然のことである。多様な学習者の要望に応じたきめ細やかで柔軟な対応が、現在の日本語教育には求められている。

2.2. 日本語研究における多様性

多様性は日本語研究においても見受けられる。現代日本語の文法は、言語学と日本語教育の進展に大きな影響を受けて成立した。古典日本語研究が過去の用例に依拠した研究であるのに対し、現代日本語研究は、それが本格的な研究対象となった当初、個人の研究手法の中心は母語話者である研究者自身の「内省」であった。当初から言語学研究会や国立国語研究所のような集団的・組織的な研究においては、実例を収集する研究が行われていたが、その後、個人のレベルでも用例を収集し分析する実証的・記述的研究も広がり、コーパスの一般化によって、内省のみで行われる研究を凌駕する状況にあるといっ

てよいだろう。こうした研究手法の変化と日本語教育の拡大に支えられた現代日本語研究は 1980 年代から大きく進展し、「何をやっても新しい研究となった時代」には多数の若手研究者・大学院生がこの分野に参入することとなった。しかし、それから 40 年近くが経つ現在は「研究テーマの発掘が困難な時代」となり、同時に、多様化した日本語教育の現場と日本語研究との乖離も頻繁に指摘されるようになってきている。

このような現代において、「ことば」の研究、特に「文法研究」は、日本語教育のためにどのような言語研究ができるのだろうか。

3. 文法研究には何ができる？

3.1. 文法研究に求められること

「ことばの研究」、ことに文法ということばのルールを研究する分野においては、研究の出発点が「なぜこのことばはこのように使うのか」「なぜこのことばはこのように使えないのか」という素朴な疑問にあるのはごく一般的なことであろう。日本語教育にも関わる人であれば、学習者からの質問や学習者の産出の中に、その出発点があることも珍しくなく、そうした疑問の解決に取り組むのが現場の教師自身であることもあれば、学習者自身がその立場になることもあった。そしてまた、このような日本語教育の現場から生まれた疑問が、日本語・日本社会、あるいは言語一般やコミュニケーションの本質の一端を明らかにすることに繋がりをうること、解決への取り組みが学習者・教師の知的好奇心を刺激し、学習と教育のモチベーションを高める契機ともなりうることは、現場の教師ならば一度や二度は経験があるのではないだろうか。

一方で、日本語教育の枠組みの中での文法研究には、「役に立つ」ことが求められるのもまた当然のことである。「学習者に役立つ文法研究」「現場の先生たちに役立つ文法研究」が求められていること、そうした研究がこれからも引き続き生まれてくることを期待するが、しかし新しい研究分野を開拓する

ことは簡単なことではなく、まして日本語の初級文法項目のような基礎的項目において新しい研究課題を見出すことはかなり困難なことである。

だが、そうした初級文法項目の中には「文法研究は進んでいるのに、うまく教えられない」というものも多く含まれていることもまた、指摘されている [cf. 江田・堀 2018]。そこで本稿が提案したいことは、「既存の研究を再検討し、教育に役立つものへ再構築すること」である。具体的な例として「授受表現」、および、助詞「へ」と「に」の教え方を取り上げる。

3.2. 文法の「スパイラル」な教え方

既存の文法研究を再検討し、教育に役立つものへ再構築する場合、重要な観点として、「いつ、何を、教えるか」ということがある。

ことばの学習を山登りにたとえ、ふもとから山頂へ到達することが一つのゴールと考えてみると、その道のりは常に「一直線」というわけにはいかない。簡単なところは一直線に、難しいところはジグザグに上っていくことになる。



図1 山



図2「スパイラル」な学習

だが、実際の登山であればそうした登り方でもよいのかもしれないが、ことばの学習はむしろ、図2のようなイメージではないだろうか。山の周囲をぐるりと一周し、一通り必要な表現を学ぶと、ある程度のことが表現できるようになる。中間言語の一段階と考えてもよい。だが、さらに高度な表現を学び、運用できるようになるためには、新しいことを学びつつ、過去に習った項目について更に深い内容を学び、同時に、スムーズに使いこなせるようになっていかなければならない。そうした過程も含めると、既に学んだことをもう一度学びなおす必要も出てくる。同じ形式の少し違う用法を新たに学んだり、類義表現相互の違いを学んだりする必要が生じる、ということである。

このように、ことば、中でも文法の学習はスパイラルに進行していくと考えると、どの段階で何を学ぶことが必要なのか、ということを示唆することが求められる。

4. ケーススタディ (1)― 授受表現の教え方

4.1. 日本語の授受表現の特殊性

日本語文法の中で世界的に見てもっとも特殊で複雑なものは「授受表現」であろう。その特殊性は、授受動詞が3系統（あげる・くれる・もらう）あること、特に、Give動詞、すなわち与え手が主語に

なる動詞に「くれる」と「あげる」の2つがあることである。「くれる」は「誰かが話し手（私）に与える」という求心的な Give 動詞であり、「あげる」は「話し手（私）が誰かに与える」という遠心的な Give 動詞である。

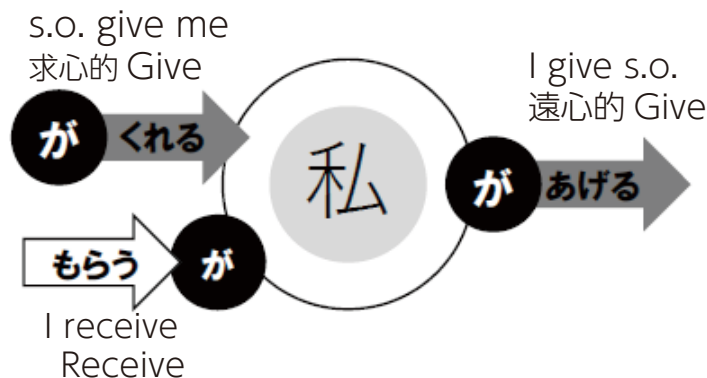


図3 基本3授受動詞

授受動詞が3系統（あげる・くれる・もらう）ある言語、Give 動詞にこのような2種があり、授受動詞が3系統をなす言語は、世界の諸言語の中でも日本語だけであると言われている。このため、授受表現は母語にかかわらず、全ての学習者にとって習得が困難な項目であることがわかる [cf. 山田 2004 : 340、354 を改編]。

表1 世界の授受動詞

| | | 物の授受 | | | 行為の授受 | | |
|---|------------|------|-----|---------|-------|------|---------|
| | | Give | | Receive | Give | | Receive |
| | | あげる | くれる | もらう | てあげる | てくれる | てもらう |
| 1 | 日本語（東京語など） | X | Y | Z | X | Y | Z |
| 2 | カザフ語 | X | | Z | X | | Z |
| 3 | モンゴル語 | X | | Z | X | | 特別な語形 |
| 4 | 朝鮮語 ヒンディ語 | X | | Z | X | | |
| 5 | 英語 | X | | Z | | | |
| 6 | サンスクリット語 | X | | X + 接辞 | | | |
| 7 | サモア語 チベット語 | X | | | | | |

それだけではない。3系統の授受動詞にはそれぞれ敬語形式があり、さらに「あげる」には下向き待遇の「やる」がある。よって、表2のように、授受動詞には7動詞がある。この中で特異なのは、「くれる」である。「あげる」「もらう」は主語と視点が一致しているが、「くれる」は主語と視点がずれる。この「くれる」の存在が日本語の授受表現を難しくしている。さらに加えてもう一点、表1にもあるように、これら7動詞は、本動詞の用法と補助動詞の用法の両方をすべて持つ。

日本語はこのように「授受表現が高度に発達した」言語であると言える。

表2 日本語の授受7動詞

| 主語 | 与え手 | | 受け手 |
|-------|-------|------|------|
| 視点(私) | 与え手 | 受け手 | |
| 上向き待遇 | さしあげる | くださる | いただく |
| 基本動詞 | あげる | くれる | もらう |
| 下向き待遇 | やる | | |

4.2. 授受表現の教え方

このような「複雑な」あるいは「高度に発達した」授受表現を、どのように教えたらよいのだろうか。3つの授受動詞を最初からすべて教える必要があるのだろうか。教える場合にどのような順序で教えるべきなのか。

前節の図3に示したように、日本語の授受動詞には、遠心的な動詞は「あげる」1つしかないの、これは教えざるを得ないが、求心的な動詞には「くれる」と「もらう」がある。「父は私に時計をくれた」といっても「私は父に時計をもらった」といっても同じなのであるから、「くれる」と「もらう」のどちらか1つに絞ることはできないだろう。

もし一つを選ぶとした場合、選択の方針としては2つが考えられる。一つは「より簡単」なほうを教えること、もう一つは「より高頻度で使用されているもの」を教えることである。

まず「くれる」と「もらう」のどちらが「より簡単」なのであろうか。

4.2.1. 本動詞の場合

本動詞の場合、より簡単なのは「もらう」である。なぜなら「くれる」を教えるには、日本語に give 動詞が2つ存在するという、世界のどの言語にも見られない特殊な事実を教える必要があるからである。また「くれる」は主語と視点がずれるという文法的な複雑さも持つ動詞である。それに対して「あげる」と「もらう」は主語と視点が一致するという点で、ごく一般的な動詞である。よって、まずは「あげる」と「もらう」によって授受が表現できるようになればよいことが示唆される。

では頻度についてはどうだろうか。国立国語研究所の「現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)」のコアデータを調べてみると、次のような結果になり、「もらう」のほうが「くれる」よりも多く使用されている。

表3 授受動詞の使用頻度

| 全数 | 授受以外 | | 本動詞 | 補助動詞 |
|-----|------|------------------|-----|------|
| 350 | 272 | あげる(遠心的 Give) | 14 | 64 |
| 582 | 2 | くれる(求心的 Give) | 19 | 561 |
| 439 | 0 | もらう(求心的 Receive) | 100 | 339 |

言語的な複雑さと頻度のいずれにおいても、「もらう」のほうが「くれる」よりも優先できることが支持された。

ただし、この頻度調査から二つ気になることが明らかになった。いずれも「あげる」についてである。まず第一は、上に「日本語の授受動詞には、遠心的な動詞は「あげる」1つしかないの、これは教え

ざるを得ない」と述べたが、この「あげる」の Give 動詞としての使用頻度が「くれる」「もらう」に比べて非常に低いことである。既に補助動詞「～てあげる」については、押しつけがましきがあり、使用に制限があることが知られているが、本動詞についてもその使用が抑制されていて、「日本語は話し手が物を得たことは積極的に表現するが、与えることは積極的には表現しない」ということが示唆される。ことに、押しつけがましきという点では、目の前の聞き手に対し、「(私は)(あなたに)これをあげます」のような表現が最もリスクの高い表現となりうる。よって、仮に「あげる」を教えるにしても、産出練習としてはそのような状況設定は避けねばならないし、あるいは思いきって「あげる」は、理解語彙の一つであるとしての練習(例えば聞き取り練習など)に重点を置き、産出の練習はあまり行わないほうが学習者にとっては利益がある可能性も高い。

気になることのもう 1 点は、「あげる」の使用頻度自体は低くないということである。「あげる」は書き言葉においては、Give 動詞としてよりも、物理的上方移動(例:手をあげる・荷物を棚にあげる)やその派生的・比喩的用法(例:腕をあげる・声をあげる)としての使用がはるかに多いことがわかる。だが、日本語の初級教科書では「あげる」という動詞は Give 動詞としてのみ教えられることが多いのではないだろうか。「あげる」の Give の意味は上方移動の意味から派生的に生じていると考えられるので、初級の教科書でもこちらの意味を積極的に教えることが必要ではないだろうか。

以上、本動詞としてまず優先的に教え、運用練習をすべき動詞は「もらう」であること、「もらう」と物の移動の方向が同じ「くれる」は優先順位が低いこと、また「あげる」については、産出練習は控えるべきであることを述べた。

4.2.2. 補助動詞の場合

次に補助動詞の場合ではどうか。まず表 2 から使用頻度を見ると、「～てくれる」がもっとも頻度が高く、次いで「～てもらう」であり、押しつけがましきがあると言われる「～てあげる」は最も低い。では、なぜ「～てもらう」のほうが「～てくれる」よりも使用頻度が低いのだろうか。その理由の一つとして考えられるのは、構造的な複雑さである。「～てもらう」は動作の仕手ではなく、受け手を主語にする表現であり、動作の仕手が主語となる「～てくれる」のほうが構造的には単純な動詞だと言えるからではないだろうか。

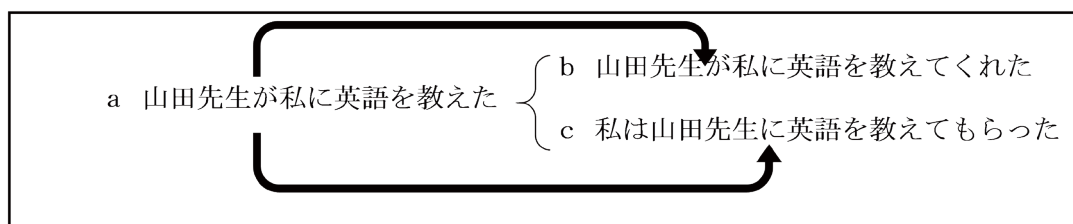


図 4 補助動詞「～てくれる」と「～てもらう」

a「山田先生は私に英語を教えた」ことを恩恵的に表現する場合、b「教えてくれた」の場合は、「教える」のも「(恩恵を)くれる」のも主語である「山田先生」であるが、c「教えてもらった」を使用する場合、文全体の主語は「私」に変化し、「教える」主体の「山田先生」はガ格ではなく、二格によって表される。「～てもらう」においては、動作主が降格する現象が起こる点で、受身や使役と同様の現象が起こっていると見ることができる。このように「～てくれる」に比べて「～てもらう」は構造的な複雑さを持っている。これは学習者にとっても教える教師にとっても負担の大きい構文であると言える。

よって、「山田先生に教えてもらいました」「友達に書いてもらいました」と言う必要性は低く、

その場合は「山田先生が教えてくれました」「友達を書いてくれました」と言えばよいということになる。なお、第二言語習得の研究からも、「～てくれる」のほうが「～てもらおう」よりも先に習得されることが指摘されている [田中 2005: 63-82]。

ただし「～てもらおう」が必要な場合もある。それは、受け手としての動作を表わすことが必要な表現と共起するばあいである。例えば「山田先生に教えてもらいました」は「山田先生が教えてくれました」と言えば済むが、「山田先生に教えてもらいたい」「山田先生に教えてもらおう」あるいは「友達に書いてもらってもいいですか」のように、受け手動作（ここでは「教えてもらうこと」「書いてもらうこと」）の主体が一人称であり、主語がその一人称に限定される文末（モダリティ）表現「～たい（願望）・～よう（意志・勧誘）・～てもいいですか（許可求め）」などを伴う場合、「～てもらおう」がどうしても必要で、動作の仕手を主語とする「～てくれる」によって表現することはできない。また「先生に教えてもらってください」「友達に書いてもらってもいいですよ」のように、受け手動作の主体が二人称であり、主語がその二人称に限定される文末（モダリティ）表現「～てください（依頼）・～てもいいです（許可与え）」を伴う場合も「～てくれる」によって表現することはできない。逆に言えば、こうした表現と「～てくれる」を一緒に練習する意義があるということになる。

「～てあげる」については、既に多くの指摘があるように注意が必要である。押しつけがましさが出るので、初級の段階では家族などへの場合を除いて、使わないほうが良いこと（例：父に料理を作ってあげた）を伝える必要がある。そして、様々な表現を通じて、日本語が人間関係をきめ細やかに表現する言語であることが理解される上級学習段階になれば、目の前の聞き手が動作主で、恩恵の受け手がその場にはいない場合（例：ケーキを作ってあげたらどうですか／教えてあげてください）に、動作主である聞き手を高めるために使用されることを教えることもできるようになるだろう。逆に言えば、その段階になるまでは「てあげる」の産出を求める必要はないということになる。

以上、補助動詞として優先的に教えるべきものは「～てくれる」であること、押しつけがましさが指摘される「～てあげる」は、産出練習は不要であること、「～てもらおう」については、それが文法的に必要な表現を学ぶ段階になって、産出練習が必要となることを述べた。

4.2.3. 授受表現のスパイラルな教え方

最後に、授受動詞の教え方についてこれまで述べたことをまとめながら、その段階的な指導についての案を示す。

まず最初の段階では、本動詞としての「もらう」を学ぶ。自分が誰かから物を贈られた場合の表現として必ず使えるようになる必要がある。逆に自分が誰かに物を贈ったことを表わす動詞として「あげる」を提示するが、産出練習はさほど必要ではない。「友達にケーキをあげました」「先生に旅行のお土産をあげました」ではなく、「友達にケーキをプレゼントしました」「先生に旅行のお土産を渡しました」のような「あげる」以外の動詞や、目の前の相手に対しては「これ、旅行のお土産です。どうぞ」のような表現を練習するほうがよい。

その次の段階として「くれる」を導入する。「くれる」は Give 動詞であり、与え手が主語になること、ただし話し手は与え手にはなれず、受け手になる動詞であること、従って、「友達が（私に）旅行のお土産をくれました」のように受け手表現「私に」は言わなくてもよいことも示してよいだろう。

補助動詞の場合は、まず「～てくれる」を学ぶ。自分が誰かから恩恵を受けた場合の表現として必ず使えるようになる必要がある。逆に自分が誰かに恩恵を与えたことを表わす表現「～てあげる」は産出の必要はない。「友達が教えてくれました」は産出できなければならないが、「（知らないというので）友達に教えてあげました」は「友達に教えました」と言えばよいのである。その後、「～てもらおう」

を導入するが、「李さんに料理を作ってもらいたい／作ってもらおう／作ってもらってもいいですか／作ってもらってください／作ってもらってもいいですよ」のような表現とともに産出の練習を行う。これは中級以上であろう。

その次の段階として、敬語動詞「いただく・くださる」の本動詞・補助動詞、さらに上級の段階で必要が生じた場合は、「さしあげる・やる」を取り上げる。

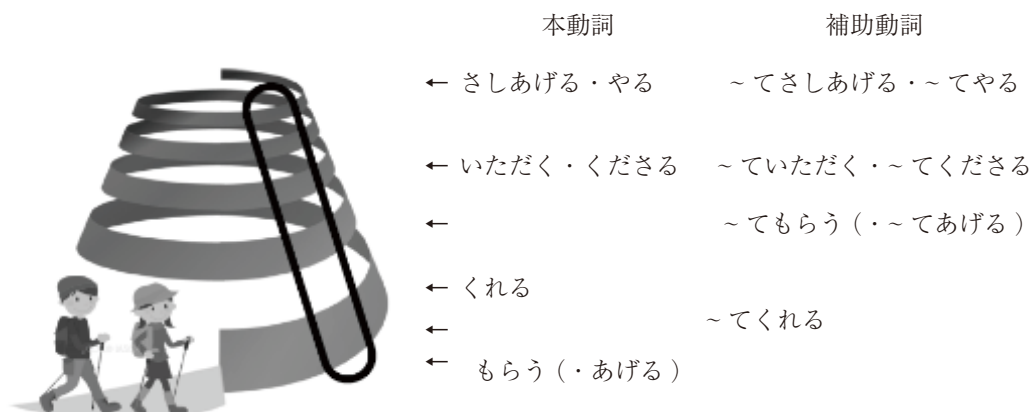


図5 授受表現のスパイラルな教え方

初級の段階について見れば、このような教え方の利点はもう一つある。「あげる・くれる・もらう」という基本3授受本動詞を最初の段階で導入するとしても、その機能が重ならないように提示できることである。すなわち、話し手が物を受け取った時は「もらう」、行為を受け取った時は「～てくれる」、そして「あげる」は本来、物理的な上方移動を表わす動詞であり、派生的に遠心的な Give 動詞として使われるが、その産出はしなくていいこと、この3点である。これらにより、学習者の負担は大きく減少するのではないだろうか。

2.1. 節に述べたように、学習者は多様化しており、日本語を必ずしも体系的に学ぶ必要はないことも指摘されて久しい。多様な学習者に対し、短期間に必要なことを適切に教えることが求められている。

一方で、長く日本語を学ぶ余裕と必要がある学習者には、いずれかの段階で、授受表現の体系的な指導が必要になるだろう。日本語教育の現場ではその両方が求められている。

5. ケーススタディ (2)― 移動場所を表わす「へ」と「に」

5.1. 「へ」と「に」の相違点

移動の方向や到着点を示す助詞に「へ」と「に」がある。

- (1) 去年の夏、北京へ行った。
- (2) 去年の夏、北京に行った。

初級の日本語教科書では、移動の方向・到着点を表わす助詞としては「へ」を教えるのが一般的であるが、実際には「に」も使うことができる。学習者から(1)と(2)の違いを質問されたらどのように答えることができるだろうか。

「へ」と「に」には次のような違いがあることが知られている [森山 2006 : 26-27、前田 2014 : 86-89]。まず意味的な違いを考えてみよう。辞書を引いてみると、「へ」は「何らかの移動を伴う動きの方向・到着点を表わす」のみが示されているが、「に」には多くの意味が示されている。場所としては、

移動の方向・到着点の他、存在場所（教室にいる、机の上にある）、時間（6時に起きる）、移動の目的（買物に行く）、動きの対象（弟に負ける、弟に渡す）、動きの源（兄にもらう、弟に教わる）、受身・使役の主体（先生に褒められる、学生に本を買わせる）など、多くの用法がある。こうした違いを図示すると次のようになる。

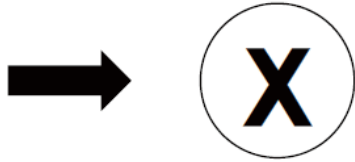


図6 「Xへ」のイメージ

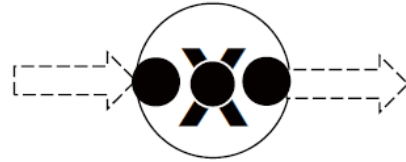


図7 「Xに」のイメージ

必ず移動を伴う「へ」は、「その移動の動きが完了していない、動きの途中段階にある」という「動的」な意味を持つのに対し、移動以外の意味も持つ「に」は何らかの「密着の対象」（国広 1867、2006）を表すと考えられる。だが、例(1)(2)の違いを尋ねた学習者にこの図を示したとしても、学習者が両者をうまく使い分けられるようになるとは思われない。

一方、両者には表4のような文法的な違いがあることもわかっている。例(1)(2)は表4の「連用」の場合であり、「へ」も「に」もどちらも使用できる環境である。この場合、両者の意味的な違いを見出すことは難しい。一方「連体」と「終止1」は「へ」のみが用いられる。よって、このような用例が出現する段階で、学習者に両者の違いを教えることは有効であろう。なお、「へ」が連体や終止の用法を持つのは、もともと「へ」は名詞であり、名詞「辺」が助詞化・文法化した形式であるという歴史的事実により、説明できるだろう。

表4 「へ」と「に」の文法的な違い

| | 例 | へ | に |
|-------------|--------------|---|-------|
| 連用 | 大学へ行く／大学に行く | 可 | 可 |
| 連体 | 友達への手紙 | 可 | 不可 |
| 終止1（引用の「と」） | 次から次へと／西へ西へと | 可 | 不可 |
| 終止2（文末） | お母さんへ | 可 | まれに出現 |

そして、もう一つ、「へ」と「に」の相違を学べるケースとして、表4の「終止2」の場合を見てみたい。「終止2」は、文がそこで終了する場合で、例えば、短い手紙・メッセージや掲示物の読み手を示す場合（例：新入生の皆さんへ）や作品タイトル（例：『地球へ…』武宮恵子）などが挙げられる。ただし、このような場合に「に」が使えないか、というと、必ずしも不可能とは言えないかもしれない。

そこで、こうした文末（終止2）の「へ」や「に」が頻繁に出現する具体例として、新聞の一面の見出しを取り上げてみたい。

5.2. 新聞1面見出しにおける「へ」と「に」

新聞1面記事の見出しには、次のように「へ」で終わるものがしばしば見られる。

- (3) 日中 この先へ 平和友好条約 40年 （日本経済新聞 2018年 10月 23日朝刊）
- (4) ナマハゲ 無形文化遺産へ （朝日新聞 2018年 10月 25日朝刊）

- | | |
|-------------------|-----------------------------|
| (5) スバル、大規模リコールへ | (朝日新聞 2018 年 10 月 25 日朝刊) |
| (6) 「脱・現金」へ | (日本経済新聞 2018 年 10 月 25 日朝刊) |
| (7) ジャカルタ 3 空港体制へ | (日本経済新聞 2018 年 10 月 25 日朝刊) |
| (8) 日ロ、経済活動を協議へ | (日本経済新聞 2018 年 10 月 26 日朝刊) |

いずれも、近い将来に起こる出来事を示す新聞一面記事にふさわしい内容を表わしている。例えば (5) には「スバルが近く、エンジン部品の不具合で大規模なりコール（回収・無償修理）を国土交通省に届け出る。対象は複数車種に及ぶ模様だ。」という記事が続くのである。なお、次の (9) は、終止ではなく連用のタイプであるが、移動でないにもかかわらず「へ」が用いられている。このような「へ」も、これから起こる出来事を示すものと言えるだろう。

- (9) 総合取引所へ協議 日本取引所と東商取（日本経済新聞 2018 年 10 月 23 日朝刊）

一方で、新聞 1 面には、次のような「に」で終わる見出しも見られる。

- | | |
|---------------------|-----------------------------|
| (10) 日本の大学成果 米企業に | (日本経済新聞 2018 年 10 月 23 日朝刊) |
| (11) ガソリン高騰、160 円台に | (朝日新聞 2018 年 10 月 25 日朝刊) |
| (12) エンジン域内生産 義務に | (日本経済新聞 2018 年 10 月 26 日朝刊) |

だが、両者には大きな違いがある。「に」が用いられているこの 3 記事の内容を見てみると、いずれも「近い将来に起こる出来事」ではなく、「既に起こってしまったこと」について書かれた記事なのである [cf. 杉村 2006 : 55]。(10) は、「日本の大学などの研究論文がどこでビジネスの種である特許に結びついているかを調べると、米国の比率が 4 割を超す。」という記事であり、既に「成果が米企業に行ってしまった」ということを述べている。(11) は「レギュラーガソリンの全国平均値が 3 年 11 カ月ぶりに 1 リットル当たり 160 円台をつけた。今後も高止まりが続くとの見方もある。」という記事で、160 円という数値を示すガソリンスタンドの電子看板の写真を添えている。(12) はややわかりにくい、「米国とカナダ、メキシコが合意した新たな貿易の枠組み「米国・メキシコ・カナダ協定 (USMCA)」の中で、現地生産する自動車について、エンジンや変速機といった主要部品を 3 カ国で生産するように義務付けていることが分かった。」「3 カ国は 9 月 30 日、北米自由貿易協定 (NAFTA) を見直して、新たな協定を結ぶことで合意。」という記事が続くことから、9 月 30 日にすでに義務化が合意されていたが、そのことが今回判明した、ということを示す 10 月 26 日の新聞において報道しているのである。

いずれも「既に起こったこと」を示す記事であり、動きの途中を示す「へ」ではなく、動きが終わった段階にあること、すでにその段階に到達していることを示す「に」が適切に用いられていることがわかる。

だとすると、次の 2 つの見出しから予想される記事の内容は、異なることになる。

- | |
|---------------------|
| (13) ガソリン高騰、160 円台へ |
| (14) ガソリン高騰、160 円台に |

また、(4) のニュースは、無形文化遺産登録が決定した 11 月 29 日には、yahoo! JAPAN ニュースにおいて、次のように「に」による見出しが提示されていた。

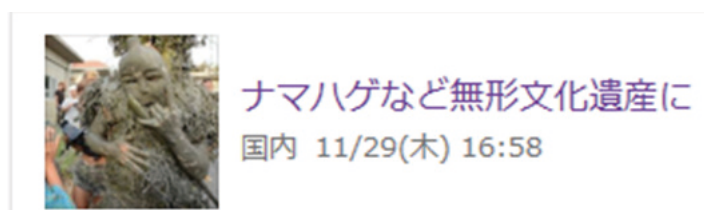


図 8 「ナマハゲなど無形文化遺産に」

「へ」と「に」の意味的な違い（動的か静的か）を教えることが学習者にとって有益な段階となるのは、このような表現と接するレベルにおいてであると言えるのではないだろうか。

5.3. 「へ」と「に」のスパイラルな教え方

以上、述べてきたことをまとめると、次のようになる。初級の段階では連用用法、すなわち移動の到着点・方向を示す「へ」と「に」の違いは説明する必要はなく、どちらも使えること、「に」のほうが用法はるかに広いことを確認する。次に、中級段階で、両者の重要な文法的相違として、連体用法（～への）の有無を提示する。終止用法は、終止1「次から次へと」や終止2「(モノや情報の受け手)へ。」などの慣用的な表現・用法と接する中で（おそらく中上級の段階で）触れることができる。そして、「へ」と「に」の本質的な意味的相違点、すなわち動的か静的かということは、例えば新聞記事を読むような上級段階でならば、学ぶ意義のある内容であると言えるのではないだろうか。逆に言えば、「へ」と「に」のような初級項目にも、中級レベル・上級レベルで学ぶべきことがある、ということである。

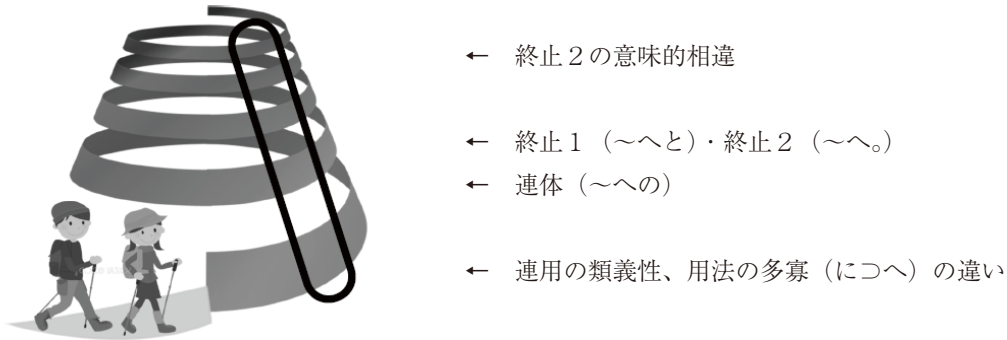


図9 「へ」と「に」のスパイラルな教え方

6. おわりに

本稿は、日本語教育が様々な多様性にさらされている現在、文法研究と文法教育に何が求められているかを考えてきた。そして、これまでの研究の蓄積を生かし、再検討することにより、多様化した学習者への文法教育に役立つものへ再構築することを提案し、具体的な例として授受表現の教え方と、助詞「に」「へ」の教え方を取り上げた。このような再検討・再構築が必要な文法項目は他にもあると考えられるし、逆に、こうした見方ですべての文法項目を改めて見直していくことが必要だとも言えるだろう。これからの文法研究と文法教育に引き続き注目と期待をしていきたい。

参考文献

- 庵功雄 2012「日本語教育文法の現状と課題」『一橋日本語教育研究』1号 pp.1-12（一橋大学）
- 国広哲弥 1967『構造的意味論—日英両語対照研究』東京 三省堂
- 国広哲弥 2006『日本語の多義動詞—理想の国語辞典』東京 大修館書店
- 江田すみれ・堀恵子（編・著）2017『習ったはずなのに使えない文法』東京 くろしお出版
- 菅井三実 2007「格助詞「に」の統一的分析に向けた認知言語学的アプローチ」『世界の日本語教育』17, pp.113-135（国際交流基金）
- 杉村泰 2006「イメージで教える日本語の格構文」『言語文化論集 田野勲教授退官記念号』27-02, pp.53-65（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）

- 田中真理 2005 「学習者の習得を考慮した日本語教育文法」野田尚史 (編) 『コミュニケーションのための日本語教育文法』 pp.63-82 東京 くろしお出版
- 當作靖彦 2013 『NIPPON3.0の処方箋』東京 講談社
- 野田尚史 (編) 2005 『コミュニケーションのための日本語教育文法』東京 くろしお出版
- 原田登美 2004 「日本語会話における<授受表現>の使用実態とポライトネス・ストラテジ「日本語会話データベース (上村コーパス)」に見る」『言語と文化』11 (甲南大学)
- 前田直子 2014 「日本人が日本語文法を学ぶ意味を考える」『文学』第15巻 第5号、pp.85-97
- 前田直子 2016 「プレゼンテーションを通して文法リテラシーを身につけよう」福嶋健伸・小西いずみ (編) 『日本語学の教え方-教育の意義と実践』 pp.1-20 東京 くろしお出版
- 森篤嗣・庵功雄 (編) 2011 『日本語教育文法のための多様なアプローチ』東京 ひつじ書房
- 森雄一 1995 「助詞「へ」の歴史についての認知論的考察」『築島裕博士子機記念国語学論集』 pp.291-310 東京 汲古書院
- 森山卓郎 2002 『表現を味わうための日本語文法』東京 岩波書店
- 山内博之 2009 『プロフィシエンシーから見た日本語教育文法』東京 ひつじ書房
- 山田敏弘 2004 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』東京 明治書院

Japanese Language and Japanese Grammar Teaching in Multicultural and Multilingual society

Naoko MAEDA
(Gakushuin University)

The aim of this paper is to consider how to teach Japanese grammar to the learners who have various backgrounds in multicultural and multilingual society. The most important thing for the teachers is to know the learners' needs and target level of Japanese language and to offer them their necessary information. This paper shows two examples: Giving and receiving expression and particle *e* and *ni* that express the arrival point of the motion. First, both of Japanese *kureru* (give) and *morau* (receive) express that the speaker gets something but *morau* has priority as a main verb and *kureru* as an auxiliary verb *te-kureru*. The particle *e* and *ni* have almost the same meaning but their essential meanings are slightly different. To learn this difference would be useful and stimulate the intellectual curiosity for the learners of the advanced level, who would read the newspapers, for example.

「世界中の日本地域史研究」報告要旨

(2018年12月14日(金)開催)
ポーター・ジョン(文責)

1. 養蚕の導入と村の変化—武蔵国大里郡大麻生村の堤外耕地の事例

報告：松沢祐作(慶應義塾大学)

本報告では、武蔵国大里郡大麻生村(現在の埼玉県熊谷市内)の堤外耕地(堤防と河流のあいだに所在する耕地)について、村がその管理にどのように関わったかを中心に検討した。幕末開港期に蚕種・蚕糸が輸出品となると、堤外耕地は培桑の適地として新たな用途が生まれ、これまでの耕地に対する村のかかわり方が、監視にかかわる村外の賤民身分組織との関係も含めて変化した。この点を、村の定めた議定書を中心に紹介した。

2. 明治期日本における医療の「近代化」と「施設化」の展開

報告：廣川和花(専修大学)

日本近代史の中で、梅毒はもっぱら売買春制度との関係において注目されてきた。しかし梅毒は、当時の社会において極めてありあふれた病であり、決して娼妓やその客だけが罹患する特殊な病ではなかった。例えば、梅毒の進行によって起こる精神障害は「進行麻痺」と呼ばれ、長らく日本の精神疾患の一角を占め続けた。本報告では、明治期に栃木県塩谷郡喜連川において、遊郭の検梅と地域医療を同時に担った喜連川病院の医療記録を素材に、地域社会における梅毒の様相を考察した。

3. 近世身分制解体期における家畜伝染病と斃獣処理

報告：ポーター・ジョン(東京外国語大学)

本報告では、東京都公文書館所蔵の「順立帳」を主な材料として、身分制解体期における斃牛馬処理の実態を解明した。明治四年六月よりシベリア沿岸での家畜伝染病が蔓延し、国内での流行を未然に防ぐため、東京府内で斃獣の焼捨処分が命じられた。同年六月に設置された役の臨時負担体制のもと、賤民組織の構成員はその実務の担い手として位置付けられた。病獣焼却御用の歴史的背景と実施過程を分析することによって、斃獣処理の実現を支えた関係構造を具体的に把握した。

Local Japanese History in a Global Context

(14th December 2018)

Edited by
John PORTER (Tokyo University of Foreign Studies)

1. The Introduction of Sericulture and the Transformation of Village Society: The Case of Oaso Village's Arable Riverside Land

Talk by Yusaku MATSUKAWA
(Keio University)

Focusing on Musashi Province's Oaso Village (Present-day Kumagai-shi, Saitama Prefecture), this presentation examined the involvement of villagers in the management of the Village's arable riverside land. With the introduction of sericulture into Japan during the late-Tokugawa period, arable riverside land outside of the protection of dykes was put to use growing mulberry. This transformed the way that villagers had previously engaged with arable floodplain land and their relationship with the extra-village outcast status organizations that were called upon to monitor such land. This presentation considered both changes by analyzing an agreement composed by the residents of Oaso Village.

2. Syphilis and Local Society in Meiji Japan: An Examination of Medical Examination Records

Talk by Waka HIROKAWA
(Senshu University)

In modern Japanese historiography, the history of syphilis has been examined only in terms of its relationship with the nation's prostitution system. However, during the Meiji period, syphilis was a widespread affliction and was by no means a disease that only affected prostitutes and their customers. For example, the psychological difficulties brought on by syphilis' intensification were referred to as "intensification numbing" and for generations represented one of Japan's major psychoses. Focusing on the Meiji-era history of Tochigi Prefecture's Kitsuregawa region, this examined the local history of syphilis using medical examination records from Kitsuregawa Hospital, a facility that performed syphilis examinations and was a major purveyor of local healthcare.

3. Cattle Plague, Livestock Disposal, and the Dismantling of the Early Modern Status System

Talk by John PORTER
(Tokyo University of Foreign Studies)

Utilizing records from the Tokyo Metropolitan Archives, this presentation analyzed the history of livestock disposal during the early Meiji period. In the sixth month of Meiji 4, cattle plague was raging along the Siberian Coast. In an effort to prevent a domestic outbreak, the authorities ordered the prefecture-wide incineration of dead livestock. In addition, members of Tokyo's outcast association were enlisted to carry out the incineration order. This presentation examined the historical backdrop against which this order was issued and the process whereby it was implemented. Thereby, it clarified the network of social relationships that supported the order's rapid implementation.

三島由紀夫作品における暗部の愉悅

ステーブン・ドッド

(ロンドン大学 SOAS / 東京外国語大学 CAAS ユニット)

1. 三島由紀夫研究の背景について

三島由紀夫(1925-1970)は優れた小説家・劇作家だということに、多くの研究者は同意するだろう。日本文学の研究者と話していて分かったことだが、三島はニヒリストであり、ナルシストであり、欲望・美・死を自己耽溺的な視点で考える作家だと思われているようだ。三島に対するこうした相反する見方がある背景には、彼が同性愛者だったことや、右傾化したこと、衝撃的な自殺を遂げたことなどが挙げられるかもしれない。同時代の左派的な作家の作品とは違って、三島の作品には、社会的問題や政治的問題に対する不安があまり見られないように思える。1960年代に、『憂国』(1961)などで三島が右傾化していったとき、多くの批評家は彼がおかしくなったと捉えたとし、自殺した後には気が狂ったと考えた。私は、このようなカリカチュアにとどまらず、彼の作品には戦後日本の文化と政治に対する批評性があるのではないか、という観点で研究を進めている。私はむしろ、三島の作品は、人間のオルタナティブかつ型破りな姿を表現する切実な試みがなされていると考えている。

三島が小説だけでなく現代歌舞伎や能も手掛けたことはよく知られているが、私の研究対象はあくまで小説である。それも、これまで三島の「深刻な」小説、つまり純文学として書かれた小説(『仮面の告白』(1949)などの代表作)ではなく、三島が書いた大衆小説(popular fiction)に注目している。なぜなら、三島研究においては純文学作品ばかりが取り上げられるが、非日本語話者の読者に向けては、三島の小説作品の全体像を紹介することが重要だと考えるからである。

私が三島の大衆小説を研究対象に選んだもう一つの理由は、彼の深刻な作品に感じられる過剰な自己耽溺性にある。『暁の寺』(1970)の仏教哲学の冗長な描写などがいい例だが、このようなものを書くときの重圧、すなわち、文学的な才能を示さなくてはいけないという重圧は三島の創作にマイナスの影響があったのではないかと私は思うのだ。なぜなら、三島のいくつかの大衆小説には、意外なほど鋭い洞察が見られるからだ。こうした表面的には「軽い」作品の場合、三島は気負うことなく執筆を楽しみ、その結果皮肉にも、戦後の日本社会を観察し批判する力を発揮しているように思えるのだ。現在、私が研究対象としているのは、『命売ります』(1968)、『美しい星』(1962)、『複雑な彼』(1966)の三作品であるが、これらは1960年代に書かれている。1960年代というのは、三島の作品の中で、日本の社会と政治に対する批評的な姿勢が目立つようになってきた頃と合致する。

私は二つの観点から、これらの小説を考察している。一つは、言葉——特に、文体、言葉づかい、語彙。こうした作品のなかで使われる軽妙でわかりやすい文体は、純文学における自意識的で深刻な文体に対する批評の表れではないだろうか。文学のテキストとは、文学的な言語と言語のもみ合いだといったのはミハエル・バフチンだが(『小説の言葉』に出てくる「ヘテログロシア(異種ジャンル混合性)(heteroglossia)」)、彼は、一つの小説の内部では複数の言語やレジスターが支配権を巡って争いが行なわれていると論じている。一つのテキスト内における言語の衝突を、とりわけ日本語の観点から検討

する際に有用なのは、江戸時代の「俗」と「雅」の関係だろう。批評家中野三敏は『十八世紀の江戸文芸』において、江戸時代の「俗」の文学は、「雅」の文学が表す支配的な世界観の、見事な批評でありパロディであると述べている。三島は、歌舞伎や能から深く影響を受けているので、江戸時代の「俗」と「雅」の文学のことも熟知していただろうし、実際三島は、自分の能にそのジャンル特有の表現をうまく取り入れている。

つまり、江戸時代において「雅」に対し「俗」が批評になったように、三島は、20世紀の純文学を批評するために大衆文学の「軽い」文体を用いたのではないだろうか。もしも三島が、20世紀半ばの文学規範（「純文学」は「大衆文学」よりも優れている）の保守的なヒエラルキーを壊すために、自分の大衆小説に「笑い」や「パロディ」を取り入れているとしたら、彼は、村上春樹などの現代作家が行なっているジャンル分けの解体を、いち早く試みていたと言えるかもしれない。また、三島と言語をめぐる問題を考えることで、戦後の日本を表現した文学のヴォイスはどのようなものか、という大きな問いを立てることもできるだろう。

バフチンが小説内部で競り合う言語について語るとき、言語というものは、テキスト内部のさまざまな思想の闘いと捉えられる。そして、この考え方を基底にすることで、三島の大衆文学があの時代の文化・政治への批評となることを考察する第二の観点に立つことができる。

以上二つの観点から、三島の大衆小説の細部を読み込み、三島が想像したオルタナティブな人間の姿について考察するつもりである。その際に私が立てる問いは、以下のものとなる。すなわち、登場人物は誰か、その人物と現実の人々はどのように関連しているか、物語のプロットの意味とは何か。研究対象である三つの小説には、社会的なアウトサイダーが登場する。例えば『命売ります』では、主人公の羽仁男は、〈売ります〉という広告を出し、他人に自分の体を売ろうとする。

三島は同時代の日本社会を批評するために、こうしたアウトサイダーの視点を用いて、平凡な生活を破壊してオルタナティブな生き方を提案するプロットを採用する。『命売ります』は、悪趣味で、ばかばかしくて、セクシャルな作品だと思う読者もいるかもしれないが、三島にとってこの小説の「浅さ」は、戦後の家族や個人の窮屈な保守性を非難するための手段であった。三島が描こうとしたものは、暗いがスリリングでオルタナティブな世界であり、そこでは、売春やサドマゾヒズムなどの危うい快樂が生きる喜びをもたらすのである。

2. 『命売ります』とヘテロトピアについて

ここまでは、三島の大衆小説が戦後日本社会の批評になりうることについて論じてきたが、ここからは『命売ります』を詳細に考察する。

三島の小説には「ヘテロトピア」（他なる空間）が含まれていると考えると、彼の批評的なアプローチが見えてくる。ミシェル・フーコーは1967年の論考で「ヘテロトピア」という言葉を提示したが、これは、社会の理想の姿を表す「ユートピア」とも、社会の最悪の姿を表す「ディストピア」とも異なる。ヘテロトピアとは、一つの文化の内部で複数の現実が同時に存在している空間を指す。そこではいくつもの互いに相容れない現実が同時に存在し、争い合い、反発し合っている——ある種の戦場ともいえるべき空間である。この「ヘテロトピア」とバフチンの「ヘテログロシア」には、ある意味で共通点が存在する。つまり、この二つの言葉から想像しうるのは、一つの小説の空間内で複数の言語と思想が重なり合う様子なのである。

では、『命売ります』の内部には、どのような「ヘテロトピア」が存在するのか。どのようなオルタナティブな現実があるのか。確実に言えるのは、この小説は、二種類の大衆文学の伝統から生まれたということだ。一つは、敗戦直後の「カストリ雑誌」（パルプ・フィクション）。この「カストリ」は、

貧しいアーティストや作家たちがよく飲んでいて、粗悪で度数の高いカストリ焼酎のことであり、そこから当時のサブカルチャーを表すようになった言葉だ。1940年代から1950年代初頭にかけて、カストリ文学は、同性愛や、肉体文学や、サドマゾヒズム、変態性欲などのテーマを扱っていた。

『命売ります』を生んだもう一つの伝統とは、1950年代と1960年代の女性誌等である。たとえば、「婦人公論」、「婦人倶楽部」、「マドモアゼル」や、「週刊プレイボーイ」などであり、実際、『命売ります』は1968年に「週刊プレイボーイ」で連載が始まった。こうした雑誌は、たとえば男性に対する女性の欲望を論じたり、家族や母親のあり方、経済成長、愛、夫婦の性生活などをめぐる保守的な価値観に異議を唱えたり、というようにメインストリームの出版物があまり扱わない社会問題を取り上げていた。また、難しい言い回しは避け、より直接的な言葉で書かれているのも、三島の大衆小説と同じ特徴だと言えよう。

さて、これより先は、『命売ります』で当時の社会的慣習に挑戦するために用いられた「ヘテロトピア」の一部を取り上げ、論じることにしよう。まずは、この小説のあらすじを紹介する。物語の冒頭、主人公の羽仁男は意識を取り戻し、自殺に失敗したことに気がつくが、人生をやり直すべきか、自分でもよくわかっておらず、ただ、人生の無意味さに浸るのみである。彼は会社を辞めて、「命売ります」という広告を新聞に掲載することにする。お金を払ってくれる人に自分の命を差し出すことに決めたのだ。そして、彼は広告を見た様々な人に会って行く。たとえば、ある老人には、老人の不貞の妻をそそのかしてベッドに連れ込み、そのまま殺されてほしいと依頼され、ある図書館司書には、外国人秘密組織が行っている実験の一環で、死に至る毒を飲んで欲しいと依頼され、さらには、若者の血を求める吸血鬼の女性に命を奪われそうになる。羽仁男は毎回依頼人を満足させようと試みるも、命を失うことができない。ところが、物語が進むうちに状況そのものが変わっていく。すなわち、羽仁男が生きる意欲を取り戻すことになるのだ。しかし、すでにその時分には、秘密組織から命を狙われることとなっており、羽仁男の命運は、果たしていかに。というのが、この小説のプロットである。この小説は展開が早く、メロドラマやセクシャルな場面、コミカルな場面が繰り返されると同時に、不吉な予感も示される。三島は、人生や死、さらに人間の存在意義への疑問などを表現しているのだ。

この小説の「ヘテロトピア」の一つとして、羽仁男が昔のガールフレンドにもらった鼠のぬいぐるみの場面を説明しよう。羽仁男は、老人の妻に会った後、ヘトヘトになって自分のアパートに戻り、静かな夜をゆっくり過ごすことに決めるのだが、彼はある奇妙な行動に出る。なんと、鼠のぬいぐるみを戸棚から出して一緒に食事を始めるのだ。彼はぬいぐるみをテーブルに置き、食事の準備をする。はじめのうちは、鼠のぬいぐるみの描写におかしな点は見られないが、やがてすぐに奇妙なものになっていく。以下はその一節である。

この鼠は、狐みたいに尖った口をしていて、その鼻尖にまばらな毛が生えていた。小さな目は黒いビーズで、そんなアイディアは尋常だった。ところでこの鼠は、狂人の狭窄衣をはめられていたのである。つまり、手の自由を奪うように両手を動けなくしてしまう丈夫な白いシャツだった。そしてその胸のところに、「この患者、凶暴症につき注意」と英語で書いてあった。

それは、かわいいぬいぐるみであり、昔のガールフレンドの思い出の品なのだ。しかし、このぬいぐるみは狭窄衣を着ていて、胸元には注意書きがある。これは「見た目に騙されてはいけない」ことの表現であり、同じことは羽仁男にも当てはまる。羽仁男は他人に命を売り渡すことをためらいがないように描かれているが、この場面ではうちに込めた怒りと暴力が感じられる。

この暴力の予感、ステーキを出したのに鼠が食べなかった時に表出する。羽仁男は鼠のぬいぐるみを床に叩きつけ、恐ろしい言葉を浴びせかける。動かない鼠を見て、鼠が死んだと思った羽二男は、次のように言う。

「何だ、死んだのか。ずいぶん簡単に死ぬんだな。恥ずかしくないのか。え？ おい？ 葬式なんか出してやらんぞ。お通夜一つしてやるもんか。鼠は鼠らしく、汚い巣の中で干からびちまえばいいんだ。お前は全く、生きている内も何の役立たずで、死んでからも全然役立たずだな」と死んだ鼠をつまみ上げて、もとの戸棚へ放り込んだ。死んだ鼠の喰べ残しの小さな小さなステーキを、口へ入れた。肉のボンボンみたいで、すてきな味だった。

羽仁男は鼠のぬいぐるみを戸棚へ放り込み、再び日常生活に戻ることになる。翌朝、新たな依頼人が現れて羽仁男に命を売って欲しいと頼み、物語は新しいフェーズへと進む。「ヘテロトピア」が、複数の現実が拮抗する場所であるとしたら、三島がこの場面で小さなぬいぐるみとして提示したのは、戦後日本文化の「かわいさ」と言えるのではないだろうか。彼は「かわいさ」を「破壊と死」で無きものとし、羽仁男の方とは言えば、一見冷静できちんとしているが、内には激しい怒りが覆い隠されている。

ヘテロトピアは羽仁男が吸血鬼の女性の家に行く場面にもみられる（この場面のエロティックでゴシック的な描写を読むと三島の才能に唖ってしまう）。少し紹介しよう。吸血鬼の女性は、羽仁男をベッドに寝かせ、彼の裸体に唇を這わせ、羽仁男は飢えた吸血鬼に肉体を差し出すことに悦びを感じている。吸血鬼はこう言う。

「はじめは腕からね。逞しい腕をしてるのね」

と夫人は囁くように言った。と思う間に、傷口がしぼられるような痛みが変わったのは、夫人の口が吸っているのだった。永い静止があった。女の咽喉が何かを噛み込む。つつましやかな音がした。それが自分の血だとはっきりわかったとき、羽仁男は戦慄した。

「おいしかったわ、ありがとう。今夜はこのくらいにしておくわ」

この引用箇所の、吸血鬼の悦ぶ描写が醸し出す恐怖とエロティシズムは、読者にもよく伝わることだろう。また、この場面では、吸血鬼物語ではおなじみの、エロティックなやりとりの中で、受動的な役を男性が務める（普通では女性が血を吸われる役）という要素があることも指摘しておく。

『命売ります』のこの場面はゴシック作品のクリシエだが、羽仁男と吸血鬼の関係は、戦後の夫婦生活のパロディでもあると言える。羽仁男がこの吸血鬼と初めて顔を合わせたとき、彼女はずっと血が不足していたせいか、痩せ細り、生気がない。しかし、羽仁男が毎晩一緒にいることで、彼女は元気になっていく。

一方、見ちがえるばかり活々としてきた夫人は、家事にも精を出し、羽仁男のためにも毎晩レバーや肉や卵などを忘れない栄養満点で美味しい料理を作ってくれる一方、カビくさい家の中も手まめに磨き立てるようになり、テレビを見ながら、美しいしなやかな指を編物に動かして、神聖な、と言ってよいほどの微笑を頬に刻んでいたりする。

羽仁男の血によって、料理をしたり掃除をしたりテレビを見たりといった、エネルギーに満ちた戦後の完璧な主婦が作り出される。こうしたイメージはたしかに滑稽であるが、同時に、この場面のポイントでもある。このヘテロトピアでは、二つの生きた現実が対比されているのだ。すなわち、世俗的な家庭生活の退屈さと、心の中で解き放たれたエロティックな情熱とが。

この吸血鬼が、戦後の幸福な主婦を誇張したものだとするなら、三島は保守的な家族の価値観を批評することで、幸福だが慣習に従わない、このヘテロセクシャルのカップルが持つ力も提示していると言えよう。吸血鬼が体力を取り戻すのと引き換えに羽仁男は精気を失っていき、外出するのが億劫になっていく。二人が出かけるときは、吸血鬼が金の細い鎖の一端を羽仁男に巻きつけ、もう一端を自分の腰に巻きつけるわけだが、それは、鎖を少し引っ張るだけで羽仁男の動きを操れるようにするためだ。この鎖が象徴しているのは、羽仁男に対する権力と、羽仁男の自発的な服従である。三島は二人が互いをどう思っていたかを以下のように説明する。

そんな無駄口を叩いているうちに、彼女はもう革の散歩服に着かえて、金の鎖を持って近づいてきたので、羽仁男も、少しでも顔いろがよく見えるように派手な杏子色^{あんず}のスウェーターを着て、犬が散歩に連れ出されるように、細い金鎖を手首につけられて、家を出た。

彼女の革の服によって、二人の関係はサドマゾヒズムであることを表している。この場面で羽仁男は受動的立場にあるが、怒りではなく深い喜びを感じている。犬のように連れられることに喜びを感じているのである。このあと悲劇が起きて、二人は別れることになるが、吸血鬼の恋人と過ごした時間は、羽仁男の最も楽しい記憶として小説に描かれる。羽仁男が喜んで命を差し出した唯一の相手は、この女性だったのだ。

さて、結論として言えることは、『命売ります』で三島が提示した不穏なオルタナティブの現実を、戦後の日本社会の否定的な批評として解釈することは、間違いだということだ。むしろ、この「ヘテロトピア」は、三島にとって魅力のない世俗的な生活の様相を逆転させていることがわかる。三島が試みたのは、本物の感情と男女の関係を肯定的に描くことだった。この意味で、少なくとも三島の大衆小説の一部は、戦後の日本社会の人々が当たり前だと考えていたものを、反転させたと言えるだろう。

この原稿は、2019年1月17日に開催された2018年度連続講演会での発表(同題)を編集部の責任において編集翻訳したものです。(編集部)

参考文献

- Adam, Duncan. *Schoolboys, toughs and adulteresses: Representations of desire in the fiction of Mishima Yukio*. Ph.D Thesis. SOAS University of London, 2010.
- Bakhtin, Mikhail. 'Discourse in the Novel,' in *The Dialogic Imagination: Four Essays*, Austin: University of Texas Press, 1981, pp. 259-422.
- Foucault, Michel. 'Des espaces autres,' in *Architecture, Mouvement, Continuité* no. 5: 46-49, 1984.
- 三島由紀夫『三島由紀夫全集』東京：新潮社、2000
- 中野三敏『十八世紀の江戸文芸：雅と俗の成熟』東京：岩波書店、1999

The Utopian Pleasure of Dark Places in Mishima's Literature

Stephen Dodd

(SOAS, London University/ TUFU CAAS Unit)

Mishima Yukio (1925–1970) was a brilliant novelist. At the same time, he is frequently viewed as a nihilist and a narcissist, fascinated only by aspects of desire, beauty and death from an entirely selfish point of view. My argument is that his writing actually embodies a far sharper critical engagement with post-war Japanese culture and politics. While most critics have discussed his so-called 純文学, I will concentrate on his 大衆文学, in particular, *Inochi urimasu* (1968). On one level, this novel seems inconsequential, cheap and trashy. However, I believe that Mishima uses the very 'shallowness' of this novel as a sharp tool to challenge what he saw as the stifling, deadly dull conservatism of post-war Japanese family life and personal relationships. Furthermore, I suggest that his use of a light-hearted 大衆 literary style as a way to critique 純 literature during the 20th century can be compared to a similar critical dynamic between 俗 and 雅 texts during the Edo period.

三島由紀夫の〈男性同盟〉と 「男性同性愛者」としてのアイデンティティ

——E・M・フォースター『モーリス』との比較による
「男性同性愛」の2タイプとLGBT

佐伯順子
(同志社大学)

目次

- はじめに——〈男性同盟〉と「ホモソーシャル」
 - 1 三島由紀夫が描く「男色」と「男性同性愛」
 - 2 『モーリス』が描く二つの「男性同性愛」
 - 3 現代社会におけるLGBT報道と三島の問題提起
- 結び

はじめに——〈男性同盟〉と「ホモソーシャル」

三島由紀夫は極めて「国際的」な作家である。戯曲『サド侯爵夫人』（1965年）『我が友ヒトラー』（1968年）のように、海外に材をとった作品もあり、作品も複数言語に翻訳されている。「国際性」にも、内容、翻訳と多様な次元があるが、本稿では作品内の要素としての〈男性同盟〉に注目し、この要素が英文学、ドイツ文学にも共有されるという観点から、三島文学の「国際性」を論じたい。

本論で鍵概念として利用する〈男性同盟〉Männerbundとは、英語ではmale association, masculine society, male bond等と訳され、日本語では「男性社会」「男の絆」とも訳することができるが、生物学的な性(sex)が男のみで構成される集団を意味し、英語でいうhomosocial, male bondingに近い用語、概念である。Homosocialはセジウィックの英文学研究(Sedgwick 1985)の影響により、日本の人文・社会科学でも用いられる分析概念であるが、この用語の定義は、以下で論じるように、当事者意識とのずれがあるため、また、ホモソーシャルな集団において醸成される男性間の親密な関係においては、本稿で論じるように、sexが男性どうしであっても、genderとしては男女の関係を有する人間関係が含まれるため、本稿では、sexが男性のみの手段を表現する用語として、Männerbundを分析概念として用いる¹。

「ホモソーシャル」と「ホモセクシュアル」は、前者が同性愛嫌悪と女性嫌悪を伴う関係、後者が、性愛と恋愛感情を伴う男性同士の関係として多くの日本語論文では理解されており、両者は対立的で異質なものと規定されている。しかし、この概念の普及の要因となったセジウィック自身は、「ホモソーシャル」が強い「同性愛嫌悪」によって特徴づけられると述べつつも、一方で、「ホモソーシャル」と「ホモセクシュアル」は、截然と二分されるものではなく、両者は「連続体」(a continuum)であり、実態としては両者の区別は極めて曖昧であると明言している(Sedgwick 1985:1)。

1 ドイツの〈男性同盟〉における美少年憧憬(田村 2002)にも、少年に実質的女性性が付与される場合がある(佐伯 2015: 40-45)、本稿の分析概念としては、ホモソーシャルとは異なる意味での厳密性を意図して、この定義で利用する。

文学が描く男性同性愛の当事者意識は、セジウィックが指摘した曖昧性を、当事者の視点できめ細かく表現しており、本論では、その曖昧な当事者意識のあり方を、三島由紀夫『仮面の告白』『禁色』と、E・M フォスター『モーリス』の比較によって明らかにしたい。そして、三島文学が現代のLGBTへの偏見に対して送っている社会的メッセージの意義を指摘したい。

1. 三島由紀夫文学が描く「男色」と「男性同性愛」

三島の作品を特徴づける主要モチーフのひとつとして、男性同士の性的欲望を伴う思慕があり、その当事者意識が明確に表現されている作例が、『仮面の告白』（1949年）と『禁色』（1951-53年）である。

『仮面の告白』の主人公である「私」は、同じ男子校の生徒・近江に思慕を抱き、そこには明らかに性的欲望が自覚されている。また、『禁色』の主人公であるベテラン作家・檜俊輔は、美青年の悠一に憧れる。これらは一様に「男性同性愛」として理解されがちであるが、『禁色』には、日本中世の稚児物語、日本近世の男色文学への言及もあり、日本の歴史上の「男色」からの影響も認められる²。

「男性同性愛」は、英語の homosexuality の同義語として近代以降に一般化した用語であり、江戸以前、明治初期までの日本では、「男色」という用語が一般的に使用されてきた。三島文学において、それらの概念と実態が混在していることは既に拙著（佐伯 2015）で論じたので、重複は避けるが、近世以前の「男色」は、主として僧坊、武家、歌舞伎役者という男性限定または男性中心の職掌に支えられて実践されたものであり（詳しくは佐伯同前）、男性のみの集団、まさに「男性同盟」という環境的要因を背景となして歴史的に実践され、展開してきた。

その意味で、女性と男性が混在した現代の一般社会において、女性を恋愛対象に選択する余地がありつつも、男性への性的欲望を伴う恋慕を意味する「男性同性愛」やLGBTとは、一見類似しているが、内実は異なるのである。歴史の実態としての江戸以前の日本社会における「男色」は、前述のように、女人禁制の僧坊、男性社会である武家、同じく男性役者のみで構成される歌舞伎役者という、身体的な性（genderではなくsex）を同じくする集団を環境的条件として発展したものであり、周囲に男しかない閉鎖的な環境が、現代でいう「ノンケ」（男性に恋愛感情や性的欲望を抱かない男性）の男性をも、環境的、後天的に、男同士の性愛に走らせるという状況があった。

この、環境的要因による男性同士の性愛は、生得的な性的指向とは限らず、年上の成人男性が年下の少年を、女性の代替物として性的に愛玩するという傾向が強かった。当事者のsexは男同士であるものの、「男のジェンダーを担う側／女のジェンダーを担う側」という明確な区別があり、性的実践としては、前者が能動、後者が受動という役割分担が明確である。つまり、表面的には同性愛であっても、実質的には「同性」間の愛というよりも、ジェンダーとしては異性愛を模倣したものであり、年長者と年少者の関係には、年齢階梯的、または、身分的なヒエラルキーが重なることが多く、成人男性同士の対等な関係を意味する近代的な「男性同性愛」とは実態が異なる。日本の近世以前の「男色」とは、実態の多くは少年愛、英語では pederasty、ドイツ語の Knabenliebe に相当するものであり、現代用語のLGBTが含む gay と同一視することはできない。トーマス・マンの『ヴェニスに死す』（1912年）からの影響が認められる三島の『禁色』が描く俊輔の悠一への思いは、実態は「同性愛」よりも「男色」に近く、それは、年上の芸術家であるアッシェンバッハが年下の美少年タッジオに一方的に憧れる状況と

2 『禁色』に対する江戸以前の「男色」の影響については、佐伯 2015。

同類である³。

逆に、近代以降の「男性同性愛」は、明治の近代化以降の「人権」思想、四民平等の観点から、当事者の関係性においても、従来の身分秩序を前提としない、より対等なパートナーシップを求める「愛」が、理念としても実践としても主流化してゆく（佐伯 2015）。現代のLGBTがさすGとは、この、近代以降の「男性同性愛」を意味するものであり、前述のように、近世以前の「男色」とは異質なものである。

三島文学が描く男どうしの関係は、近代文学であるために、一見「男性同性愛」を描いているのであるが、実態としては、三島自身が近世以前の稚児男色や西鶴文学に言及するように、「男色」と「男性同性愛」が混在しており、『仮面の告白』は、男子校を舞台にしている点で、〈男性同盟〉の環境的要因が認められ、「男色」に近い特色を備えている。ただし、近世以前の男色文学が、主として年上の男性の視点で描かれ、年上の男性＝描く側／少年＝描かれる側、という、言説の一方的性みせるのに対し、『仮面の告白』は、年下の少年の側から、年上の男性への恋慕を描くという意味で、平等意識が普及した近代社会が可能にした、年下の「私」の主體的視線が描かれている（詳細は佐伯 2015）。

とはいえ、「私」の身体が虚弱で、近江のたくましい〈男性性〉に恋慕する点、近江がクラスメートでありながら、留年して実質的に年長者であるという点から、年上＝男性性／年下＝女性性という「男色」的なジェンダーの二分法は残存している。テキストの視点のありかが、年長者側か年少者側かに移動しただけで、年上男性＝男性性／年下男子＝女性性という、「男色」的欲望の特徴は温存されたままであり、男子校という〈男性同盟〉において醸成される欲望という意味でも、「男色」の特徴を残している。

ただし、近世以前の日本社会では、「男色」が社会的に公認されていたのに対し、近代以降の日本社会では、同性間の性愛は「変態」として抑圧された（小田 1996）。従って、当事者としての「私」は、男子校という〈男性同盟〉の環境を離れて、家族以外の一般女性と日常的に接触可能な環境になるならば、自分は「正常」なヘテロに“なれる”のではないかと期待を抱く。自分の性的指向を「倒錯」と悩む「私」は、園子という女性を恋愛対象とするよう努力するのである。

しかし、その試みが挫折したことで、「私」は、自分の性的指向が、環境要因による後天的なものではなく、生得的なものであることを自覚するに至る。園子と接吻して、何も感じないことを発見した「私」は、女性から性的快楽を受け取れないことを確信し、自分の男性への性的指向が、男子校在学中の一過性のものであることを自覚する。

ただし、ここで重要なのは、「私」が園子を決して嫌悪したり、軽蔑したりはしていないという事実である。女性に対して性的欲望は抱かないが、「私」は園子に対して人としての精神的な親近感を抱いており、いわば、性愛を伴わない友情というべき関係性を彼女と維持しようとする。つまり、「男性同性愛」者であることを自覚した「私」の意識に、女性嫌悪は伴っていない。Sexが男性のみの環境（英語ではホモソーシャルな環境ともいえるが、必ずしも女性嫌悪と同性愛嫌悪を伴うものではない）で思春期をすごした「私」の自意識において、男性への欲望と、女性への友情とは両立可能なのである。

女性との友情と、男性との恋愛感情、性愛が両立する当事者意識は、社会的実態としても文学、映像の表現としても存在し、近代社会の「男性同性愛」の当事者意識の多様性を描いている⁴。まとめれば、『仮面の告白』の前半が描く「私」の性的指向は、環境型であり、ジェンダーとしての女性性／男

3 三島由紀夫『禁色』と『ヴェニスに死す』の比較論は、日地谷＝キルシュネライト 1995、佐伯 2015。マンガが描く美少年への憧憬とドイツ社会の〈男性同盟〉（Kühne 1996、田村 1990、2002）との関係性については佐伯 2015。

4 江國香織『きらきらひかる』（1992年）、中島丈博『お・こ・げ』（1992年）、映画『メゾン・ド・ヒミコ』（2005年）など、現代の文学、映像には、女性と性愛を抜きにして親密になる男性同性愛の当事者が描かれる。

性性の区別がみられる点で、「男色」の特徴が継承されているのだが、女性と恋愛する可能性が与えられながらも、女性には性愛を感じないことが明確化される後半では、生得的な「男性同性愛」の当事者としての「私」のアイデンティティが確立されてゆくプロセスが示されるのである。

『禁色』においては、この「男色」と「男性同性愛」が、俊輔と悠一という二人の人物によって分けられている。俊輔の悠一への恋慕は、前述のように、若さや美貌への執着、社会的立場の上下と年齢差、不幸な結婚生活がもたらした女性嫌悪が動機付けとなって後天的に醸成された嗜好という意味で、「男色」との強い共通性がある。しかし、悠一はテキストの前半で俊輔に、生得的に男性にしか性的欲望や愛情を感じないことを告白しており、近代的な意味での「男性同性愛者」である。ゆえに、後半においては二人の間に決定的な人間観の相違が生じ、俊輔の死をもって二人には永遠の別離が訪れる。

2. 『モーリス』が描く二つの「男性同性愛」

一人の主人公である「私」のなかでの、「男色」的嗜好から「男性同性愛」の当事者としてのアイデンティティの確立、二人の人物による、「男色」的側面と、「男性同性愛」の描きわけは、E・M・フォスター『モーリス』（1913年執筆、1971年出版）との強い類似性をみせる。

『モーリス』は、イギリスのパブリック・スクールを舞台に描かれ、全寮制男子校を舞台にした男子生徒間の思慕という点で、〈男性同盟〉という環境要因を含む『仮面の告白』との明確な類似性がみられる。全寮制男子校を舞台に展開する男子生徒同士の思慕は、フランス映画『特別な友情』（1966年）、日本の少女漫画『トーマの心臓』（1974年）『風と木の詩』（1976-84年）にも共通するモチーフであり、時代と地域を横断して存在するこの共通のモチーフは、男子校という〈男性同盟〉が、男性間の欲望や思慕を促す温床となる可能性が文化や時代を超える現象であることを示している（詳しくは佐伯2015）。

『モーリス』の主人公のモーリス・クリストファ・ホールと、友人のクライブ・ダーラムが通うケンブリッジ大学は、当時は男性エリートが通う〈男性同盟〉であり、家族環境においても、『仮面の告白』の「私」が祖母に育てられ、「根の母の悪意ある愛」（180）という表現で、過剰なく女性性>に辟易する心理をみせているのと同様⁵、モーリスも全寮制のパブリック・スクールに入るまでは母、妹二人という父不在の女性に囲まれた環境で育ち、‘So you don't know many men’（18）⁶と、成人男性にあまり接していないという家庭環境の類似性がある。

ただし、モーリスは『仮面の告白』の「私」ほど強い女性への嫌悪感を示さず⁷『禁色』の俊輔のような、結婚生活や家庭生活への批判もせず、

Maurice liked his home, and recognized his mother as its presiding genius. (21)

と、「家庭」が好きであり、母も尊敬している。しかし、同時に

But perhaps out of perversity, the families did get on, and Clive and Maurice found amusement in seeing them together. Both were misogynists, Clive especially. During their love

5 『仮面の告白』の描く家族については佐伯1989。以下、三島作品の引用は参考文献により、旧字体は新字体に改め、振り仮名を適宜整理し、()内算用数字にて頁数を記す。…は引用者による中略、傍線部は引用者によるものである。

6 引用文は参考文献により、頁数を()内算用数字にて記す。下線部は引用者により、邦訳は特にことわらない限り引用者による。

7 『仮面の告白』の「私」も、成長に応じて、幼少期ほどの強い女性嫌悪はなくなり(克服し)、園子という女性への精神的親近感を抱くようになる。

women had become as remote as horses or cats; all that the creatures did seemed silly. (92)

と、モーリスとクライブは二人とも「女嫌い」であることが明言され、しかも、女性は彼らの「愛」が深まるにしたがって、「馬か猫」並みの存在と化し、どちらも「愚か」なものとかからさまに蔑視されているのである。この女性蔑視は、「女性を薪雑報だと思いなさい…女に向うときは精神を外していないと」(46)と悠一にアドバイスし、女性の知性を軽視する、『禁色』の俊輔の女性嫌悪にも匹敵する差別意識である。

しかし、二人の女性嫌悪が単純に愛情に結びついたわけではなく、最初に「愛」を告白したクライブに対し、モーリスは当初、強い拒絶反応を示す。

Durham could not wait. People were all around them, but with eyes that had gone intensely blue he whispered 'I love you.' (56)

と、周囲に友人がいるのもかまわず、性急に「愛」を告白するクライブに対し、モーリスは、

'... it's the worst crime in the calendar, and you must never mention it again...'. (56)

と、クライブの感情を「最悪の罪」として、「二度と口にしないでくれ」とまで強く拒否する。

ここでのクライブの告白には、伏線として、『饗宴』を読んだなら自分の気持ちを理解してくれるはず、という古代ギリシア文明への憧憬があり('I knew you read the Symposium in the vac', 56)、

Clive had explained in this direction ever since he had understood Greek. The love that Socrates bore Phaedo now lay within his reach,... (91)

と、ギリシア世界へのクライブの憧憬は随所に描かれている。古代ギリシア世界における歴史的事実としての「少年愛」の慣習は、近代社会における男性への性的指向を正当化するよりどころとして機能しており、三島文学も、同様の理由でギリシア文明への共感を示している⁸。

古代ギリシアの「少年愛」が、＜男性同盟＞の社会的背景にもとづき、年長者が少年を教育するという要素を有しているように⁹、クライブとモーリスの関係も、

He educated Maurice, or rather his spirit educated Maurice, for they themselves became equal. If Maurice made love it was Clive who preserved it, (91)

と、男子校という教育現場を背景とした、精神的修養と自己啓発、生徒間の相互的な触発、人間的成長という側面を有していた。男子校を舞台とした生徒間の思慕の表象においては、上級生と下級生の間の「精神」的な絆や、思春期の青少年の精神的成長がテーマとなる傾向があり、モーリスとクライブの関

8 三島由紀夫とギリシアの関係については、吉村 1971。福永武彦『草の花』にもギリシアを範とする意識がみられる（『草の花』299）。『モーリス』におけるギリシア文明への共感、伏線としてのギリシアへの言及は、学業成績優秀なモーリスがギリシア語弁論大会で、『ギリシャ史』を授与される場面（28）や、クライブのギリシアへの執着（99）とギリシア旅行、アテネ滞在（106）に顕著に表現される。'I regard it as a point of pure scholarship.'(50) と、プラトンの『饗宴』やギリシア社会への憧れと融合した「純粹な学問」という多分に概念的要素を動機付けとしたクライブの当事者意識とは異なり、モーリスは盲目的なギリシア崇拝には与しない（Maurice had no use for Greece. 99）ので、二人の性的指向が一見類似しているが、実はことなることが、ギリシアへの距離感からも示唆される。一方で、'Omit: a reference to the unspeakable vice of the Greeks.'(50) と、学監による翻訳講義において、ギリシア人のホモ・エロチズムは「口にはいけない悪徳」との認識が示され、当時のイギリス社会の男性同性愛への不寛容も表現されている。

9 古代ギリシアの「同性愛」については Dover 1978。

係も、他の男子校を舞台にした生徒間の思慕の表象と共通する特徴を有している¹⁰。

こうした男子校における生徒間の思慕は、卒業とともに消滅する一過性の関係として描かれることもあるが¹¹、モーリスとクライブの関係においては、上記の引用部分のように「対等」性が重視されており、上級生が一方向的に下級生を導くという、年齢階梯的な上下関係は希薄である。学校という知識伝達と精神修養の場が舞台であるために、男子校における生徒間の思慕は情動的というよりも知的な探求と融合しやすく、西洋社会の場合はクライブのように、それが古代ギリシア文明の教養とともに正当化されるのだが、このような知的な動機付けに基づく生徒間の思慕は、概念的であるがゆえに、生得的な同性への性的指向とは異なり、一過性に終わることがある。実際、クライブは学齢期を過ぎると、女性であるアンと結婚し、男子校卒業とともに、生徒間の思慕からも“卒業”する。

I care for you in the real sense, and always shall. We were young idiots, weren't we? –but one can get something even out of idiocy. Development. No, more than that, intimacy. Marriage has made no difference. (152)

作品の後半において、クライブはモーリスとの関係を、いわば若気の過ちとして精算し、自分はモーリスのことをいつも「気かけ」てはいるものの、それはあくまでも「親密性」であって、恋愛ではないと主張するのである。

Now that Clive Durham was safe from intimacy, he looked forward to helping his friend, who must have had a pretty rough time since they parted in the smoking-room... Clive had never supposed he would, and was glad the melodrama was over. ...Maurice had once lifted him out of aestheticism into the sun and wind of love. But for Maurice he would never have developed into being worthy of Anne. (143)

ともあるように、クライブは、一度はモーリスに積極的に「愛」を告白しつつも、それを女性との「愛」の準備段階であり、モーリスとはセクシュアリティの介在しない「友」であり、二人の関係を思春期の一過性の「メロドラマ」にすぎないものとして突き放す。男子校で経験した生徒間の思慕を、「愚かさ」からの「成長」、思春期の一過性の経験ととらえるクライブの考えは、「人間は…少し大きくなると bisexual になる、つまり男女両性的なんだね、そのあとに homosexual な時期が来る。そうして大人になるんだ」と説き、美貌の下級生に惹かれる主人公・汐見の思いを「過渡的」で「いずれは麻疹のように癒ってしまう」（335-6）と説く、福永武彦『草の花』（1954年）の男子校生徒・春日と、全く同じ認識をみせている¹²。

クライブがモーリスとの関係の表現に用いる intimacy という用語は、ギデンズが論じるように、ヘテロの夫婦関係を基盤とする「近代家族」の枠組みにとらわれず、「ロマンチック・ラブ」の概念とも厳密には一致しない、人間相互の純粋な関係性 (pure relationship) である現代社会学の用語に近いが (Giddens 1992)、作者のフォースターは、学術用語としての「親密性」を意識してこの単語を使用

10 男子校を舞台にした生徒間の思慕の教育的側面については佐伯 2015。

11 『特別な友情』『トーマの心臓』は、少年の死、年長者の転校が、生徒間の思慕を思春期ならではの一過性の関係として封印する（詳しくは佐伯 2015）。

12 Maurice was present the day their “friendship” began. (92) と、二人の関係が「友情」と表現されるのは、彼らの関係が、本稿 46 頁下段の引用 (92) のように、「倒錯」(perversity、邦訳では「特殊な性向」154) とも表現されるとおり、当時のイギリス社会の男性同性愛への不寛容を示しているが (Barus 2017)、本文で指摘するように、friend、intimacy の内実自体が、クライブの中で変化を遂げる。

しているわけではない¹³。

だが、クライブの台詞のなかにある intimacy は、モーリスとの関係を、性愛は伴わないものの、単なる友人以上に大事な存在として位置づけている意味で、ギデンズのいう「親密性」に近く、同時に、セクシュアリティを「罪悪」視するストイックなプロテスタンティズムの人間観をも内包している点が特徴である。

…though he valued the body the actual deed of sex seemed to him unimaginative, and best veiled in night. Between men it is inexcusable, between man and woman it may be practiced since nature and society approve, but never discussed nor vaunted. (144)

クライブは「身体」や人間のセクシュアリティ自体に否定的であり、ヘテロの性愛も、「自然」と「社会」が許す限りにおいて認められると考える。これは、同性間の性的欲望が「自然」にもとるとして否定する、近代的な同性愛への抑圧の典型的な発想であり、丹治愛が既に論じているように、『モーリス』の男性同性愛観には、近代医学の「倒錯」の概念の影響が大きい（丹治 2015：82-83）。『モーリス』において、テキスト前半の intimacy と friendship は、ギリシア文明を参照して正当化された、性愛を含む可能性を示唆しているが、後半においては、社会人となったクライブの価値観から、性愛を伴わない「親密性」と「友情」という意味に変化するのである。

対照的にモーリスは、最初はクライブの「愛」に対して受身であったものの、成長とともに、自身の欲望が男性にしか向かわないことを自覚し、それは、人間存在における「身体」やセクシュアリティ自体の肯定ともつながっている。

There was something better in life than this rubbish, if only he could get to it —love —nobility—big spaces where passion clasped peace, (167)

モーリスは猟場番のアレク・スカダーに出会い、彼のことを「愛」の理想とともに想起する。そして、この夢のあと、アレクがモーリスの部屋を訪れ、二人はふれあう。

But all that night his body yearned for Alec's, despite him. (181)

と、モーリスはアレクへの「肉体」の欲望を自覚し、それを lustful (181) と否定的に表現するものの、彼との性的な関係を最終的には肯定し、

'I have shared with Alec,' he said after deep thought… All I have. Which includes my body' (213)

と、かつては「親密」であったクライブに、自分はアレクと身体的関係をもったと堂々と告げるのである。モーリスとアレクとの間には階級の壁もあり¹⁴、クライブは、モーリスの性愛が、階級と同性間という当時の社会規範における二重の壁を超えたことに衝撃を覚えるのだが、モーリスは既に、かつての友人の驚きをもつとせず、自身のセクシュアリティを肯定する性的なアイデンティティを確立してゆく。

思春期に、男子校という〈男性同盟〉のなかで、環境型の一過性の性的指向と混同される生徒間の思慕を自覚した当事者モーリスが、男子校を離れても不変な、成人男性どうしの性的指向を自覚する主体としての、近代的な男性同性愛の当事者としてのアイデンティティを確立するプロセスは、地域と

13 邦訳では「不安な関係」(253)だが、intimacy という原語はより、クライブのモーリスに対する自意識を正確に伝えている。

14 イギリス社会における階級については、新井 2001。

時代は異なりながらも、『仮面の告白』の「私」と同じ、男性同性愛者としての性的アイデンティティの確立という主題を共有している。

『モーリス』は、モーリスが十四歳九ヶ月の時点から学齢期を過ぎて社会人になるまでの成長を描き、『仮面の告白』もまた、主人公の幼少期から性的成熟を迎える思春期を経た成長の過程を描いている。セクシュアリティの面のみならず、成長に伴う成人男性としてのアイデンティティの確立という点でも、両者は共通のテーマを有している¹⁵。

生得的な男性への性的指向を自覚した人物が、自分が社会規範から逸脱していると悩み、医学的見地を参照しようとする言動も、『仮面の告白』の「私」とモーリスが共有するものであり、「私」はドイツの性科学者マグヌス・ヒルシュフェルト（1868-1935年）にすぎり（『仮面の告白』352）、モーリスは直接医師に相談する¹⁶。

It would be jolly certainly to be married, and at one with society and the law. ...He had suffered and explored himself, and knew he was abnormal. But hopelessly so? (141)

女性との結婚が、社会、法との合致であり、結婚によって「異常」な自分が救われるのではないかと期待するモーリスの思いは、「園子は私の正常さへの愛、霊的なものへの愛、永遠なものへの愛の化身」（『仮面の告白』353）と、自身の性的指向を「倒錯現象」（352）と認識する「私」が、園子との恋愛、結婚によって、「正常」になれるのではないかと期待する（『仮面の告白』319）意識と重ねることができる。

‘I’ve been like this ever since I can remember without knowing why. ...’ (139) と、自身の性的指向が生得的なものであることを医師に明言するモーリスは、概念的、知的に構築された一過性の嗜好であったクライブとは異なり、セクシュアリティ自身を抑圧する禁欲主義的な人間観や当時のイギリス社会の男性同性愛への不寛容に抗して、生得的な自身の性的アイデンティティを確立してゆく。偏見に抗して自身のセクシュアリティに向き合う男性主人公の成長物語として、『仮面の告白』と『モーリス』は多くの当事者意識を共有しているといえる。

以上、三島文学および、『モーリス』の登場人物の性的指向を表で整理すれば

| | | |
|-------------|--|-------------|
| | 少年愛、男色 | 男性同性愛 |
| 特徴 | 年長者 (gender は male) と年少者 (gender は female) | 成人男性どうし |
| | 一過性 | 永続性 |
| 〈男性同盟〉の前提条件 | 環境型、後天性 | 生得的 |
| 登場人物 | クライブ、俊輔 | モーリス、「私」、悠一 |

となる。三島もフォースターも、男性主人公または主要人物（「私」、モーリス、悠一）の成長による

15 モーリスの主題としての、同性愛者としてのアイデンティティ確立プロセスについての心理的段階については、Saputro 2015。『モーリス』を当事者の性的アイデンティティの確立の視点から考察する議論として、Barus 2017。

16 モーリスから性的機能について相談されたバリー医師は、モーリスの性的指向を「獣的」(beastly thing 138) と表現して女性との結婚をすすめ、モーリスを「治療」してあげる (I’ll get you well 138) と告げる。医師はモーリスの性的指向の原因をケンブリッジ時代に求めており、暗黙のうちに、男子校がそうした指向の温床になることを理解しているが、モーリスのカミングアウトを ‘Rubbish...?’ (139) と一蹴し、ヘテロ主流社会の価値観を示す。“I’m an unspeakable of the Oscar Wilde sort” (139) と、ワイルドを引き合いに出して自らの性的指向を明言するモーリスは、同性愛を「公言すべきでない」ものと認識しつつも、発話によってカミングアウトするという矛盾した言動をみせ、ジョン・フォックス作のアメリカ文学 *The Boys on the Rock* (1984) にも、教師のアドバイスに幻滅する当事者意識や、性的アイデンティティ確立までの不安の描写など、三島由紀夫『仮面の告白』との類似性がみられる（佐伯 1997）。

意識の変化、成人としての葛藤と性的アイデンティティの確立を当事者の意識に沿って描いており、主人公、または生得的な男性同性愛者としての性的アイデンティティは、生得的ではない環境型の同性愛的嗜好を抱く登場人物（クライブ、俊輔）との対比によって鮮明になる。また、クライブやモーリス、「私」の性的指向が、〈男性同盟〉という環境によって醸成される共通点をもちつつも、ミソジニーと同性愛嫌悪を伴うとされる学術的定義としてのホモソーシャルとは全面的に一致せず、同じ当事者の間でも、年齢や環境に左右される可変的なものであるということを伝えるのである。

第三者的、客観的視点から分析される論文の定義に画一的にあてはまらない、当事者の可変的で多様な「声」を伝えるという意味で、同性間のホモ・エロチシズムを表現する文学的言説には、研究者の言説とは異質なメッセージ性がある。どれか一つの性のあり方が“正しい”というわけではなく、「これが男性同性愛者だ」という一律の定義がすべての男性間の関係にあてはまるわけでもなく、それぞれの当事者ごとに多様な性的アイデンティティや女性観があり、一人の人物の成長過程においても、環境によっても変化するものであることを、三島文学も E・M・フォースターの作品も、登場人物の主観と視点によりそう言説により、社会に伝える重要なメッセージ性を有している。それは、分析概念として用いられる「ホモソーシャル」「ホモセクシュアル」の二項対立とは異なり、実態として両者は「区別し難い連続体」であるという、セジウィックの議論の正確な理解を助けるものでもある。

3. 現代社会における LGBT 報道と三島の問題提起

三島文学とフォースターの作品は、『ヴェニスに死す』と『禁色』のような密接な影響関係はないながら、実質的には時代と地域をこえて、近代社会を生きる男性同性愛者の苦悩と性的アイデンティティの確立を描いている。『仮面の告白』の「私」の自意識は、決して三島文学固有の「特殊」なものではなく、すぐれて「国際性」を有するものであり、男性間の性的指向について、ステレオタイプな解釈や画一的理解をしがちな第三者や当事者ではない読者、研究者、市民に対して、当事者の自意識に即した多様な「声」を発信する社会的意義をもつものである。

ただし、これらの表現に対する読者、またはオーディエンスの受容状況については、問題がないわけではない。映画化された『モーリス』（1987年）は、原作では多様で可変的な当事者の「声」を伝えていたが、映像として表現されると、当事者のエンパワメントになるというよりも、美貌の青年たちの視覚的表象をアジアの女性オーディエンスが鑑賞するという、原作者の意図をこえた社会的受容が生じ、それは、現代日本社会における BL 漫画の受容と同じく、むしろ多様な当事者の実態とは異なる、外見や芸術性重視の、差別を助長しかねない表現として、当事者からの批判の対象となる側面を含む（佐藤 1996）。

美貌や芸術的才能という特定の性質に左右されず、等身大の LGBT の多様な当事者意識を表象することは、文学、映像において十分に主流化しているとは言いがたく、今後の課題といえるかもしれない。とはいえ、『新潮 45』（新潮社）の休刊問題が示すように¹⁷、現代日本社会の LGBT に対する不寛容にてらせば、三島文学はいまだ重要なメッセージ性を有しているといえる。

LGBT に関する偏見は社会より家族のほうが強く、すべての親は子供に結婚出産を望んでいると明言し、子供を作らないこと＝「生産性」がないとする『新潮 45』掲載記事は、出産を個人の主体的

17 杉田水脈「LGBT 支援の度が過ぎる」（『新潮 45』2018年8月号、新潮社、2018年7月）について、「あまりに常識を逸脱した偏見と認識不足に満ちた表現」（新潮社社長声明、2018年9月21日）「このような事態を招いたことについてお詫び致します」（『新潮 45』休刊のお知らせ）2018年9月25日、株式会社新潮社」と、出版社が声明を出し、当該雑誌の休刊（2018年9月）を招いた事態（新潮社公式ホームページによる）。なお、性的多様性の表現として、LGBTQ という用語も使われるが、当該記事との対応のため、本稿では LGBT を用いた。

選択ではなく社会のためとみなす、戦前期日本社会の「産めよ増やせよ」のスローガンと同じ発想であり、LGBT への偏見にとどまらず、ヘテロのカップルも含めて、“出産できない人間は社会に不要”という極めて画一的な人間観を刷り込む、「近代家族」至上主義の偏見にみちた言説である。

このような差別的言辭が公然と、一定の質を維持していると社会的評価を受けていたはずの評論雑誌に一時でも掲載された社会状況、また、繁殖のみを女性、ひいては人間存在全体の「生産性」と明言する人物が政界に存在しているという事実にてらせば、「女は子供のほかに何もかも生むことができない。男は子供のほかの凡ゆるものを生むことができる」（『禁色』22）という発言によって、人間には出産以外の多様な文化的、社会的「生産性」があると主張することにも意義がないわけではない。この俊輔の台詞の一部だけをきりとれば、十分な女性差別的発言であるが、出産こそが女性、ひいては人間存在のアイデンティティであると明言する『新潮45』掲載記事の人間観は、実質的に、女性のアイデンティティが出産であると公言している意味で、女性自ら、『禁色』の俊輔の女性観に加担していることになる。

「近代家族」至上主義の価値観が権力者によってメディアで公然と語られる現状において、人間としてのライフスタイルの多様性、性的多様性の自由も含めた人としての尊厳を確保するためには、いわば、毒を以て毒を制す、ともいうべき意味で、子孫確保以外の人間としての「生産性」を強調する三島文学の現代性には注目する必要がある。「近代家族」のヘテロ至上主義、繁殖＝社会貢献という価値観をふりかざす政治権力者の言説に対し、表現者はそれに対抗する言説で、マイノリティの「声」をできるだけ多様な形で表現し、社会の主流的、支配的価値観に異を唱えることが責務である。

ただし、主流的価値観への対抗的言説という、文学の社会的意義のひとつを鑑みれば、三島文学が同性愛をモチーフにしているのは、同性愛者が社会的マイノリティであるからこそ、という側面もある。マイノリティの立場からマジョリティを撃つ、という意義が失われれば、芸術的才能や美貌に恵まれ、“俗人とは違うのだ”という特権意識を動機付けとした「男色」的欲望（『禁色』の俊輔の「男色」観に顕著に表現される）は、文学的モチーフにはなりづらいという矛盾を抱えることになる。しかし、三島はそれをも相対化する形で、作品内に、「僕は…現実の存在になりたいんです」（197）という悠一の主体的発言を当事者による対抗言説として周到に組み込んでいる。作品終盤において、悠一は俊輔の「男色」的欲望の「玩具」（203）に甘んじることなく、「男性同性愛」の当事者としての主体性を明確に主張する。テキスト後半の悠一の強い「声」こそは、現代のLGBTの権利主張にもつながる発言である。

結び

ヘテロの夫婦と血縁家族を絶対的生活単位、倫理基準とした、「近代家族」主流の価値観、それに依拠する政治、社会体制への批判として、三島文学はいまだに、いや、いまこそ多大な社会的意義をもつのであり、「近代家族」至上主義に疑いをもたない権力側を中心とした価値観への対抗言説として、現代日本社会において重要な問題提起を孕む。

「文学」教育についての危機も叫ばれている日本の社会的現状を鑑みれば、LGBTに限らず、多様な人間の生とセクシュアリティのありようを広く社会に伝えるために、当事者の視点によりそった文学的言説は、社会的偏見がもたらす当事者の心身の痛み、価値の自由と相対化の可能性を読者に広く知らしめるメッセージ性を有する。三島文学の「国際性」への注目は、「文学」的営為と社会の接点、すなわち「文学」の社会的意義を確認する意味でも、極めて重要なのである。

参考文献

(一次文献)

福永武彦 (1987) 『福永武彦全集』 第二巻、新潮社

三島由紀夫 (2001-05) 『決定版 三島由紀夫全集』 全 42 巻、新潮社

Forster, E.M. (1971=1972) *Maurice*, Penguin Books. (片岡しのぶ訳 1988 『モーリス』 扶桑社)

(二次文献)

新井潤美 (2001) 『階級にとりつかれた人びと——英国ミドルクラスの生活と意見』 中央公論新社

小田亮 (1996) 『性』 三省堂

佐伯順子 (1989) 「不在の陰影—三島由紀夫『仮面の告白』における父と子」『帝塚山学院大学研究論集』 第 24 集、帝塚山学院大学

—— (2015) 『男の絆の比較文化史——桜と少年』 岩波書店

—— (1997) “From Nanshoku to homosexuality: A Comparative Study of Mishima Yukio’s *Confessions of a Mask*,” *Japan Review* 8, International Research Center for Japanese Studies.

佐藤雅樹 (1996) 「少女マンガとホモフォビア」『クエア・スタディーズ '96』 七つ森書館

田村和彦 (1990) 「トーマス・マンと同性愛」『論集トーマス・マン』 (ドイツ文学研究資料叢 9) クヴェレ会

(2002) 『魔法の山に登る トーマス・マンと身体』 関西学院大学出版会

丹治愛 (2015) 「フォスター『モーリス』の文化研究——同性愛とイングリッシュネス」『ヴィクトリア朝文化研究』 第 13 号、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、2015 年 11 月

日出谷=キルシュネライト、イルメラ (1995) 「トーマス・マン「ヴェニスに死す」と三島由紀夫『禁色』——一つの比較」三島憲一・中山ツイグラー公子訳『文学』 第六巻第二号

吉村貞司 (1971) 「三島由紀夫におけるギリシャ」『現代のエスプリ 35 三島由紀夫』 至文堂

Barus, Agir (2017) “The Search for Sexual Identity in E.M.Forster’s *Maurice*”, *International Online Journal of Teachers in Collaboration*, Volume 1, Issue 2, Ceyhun YÜKSELİR.

Giddens, Anthony (1992) *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism Modern Societies*, Stanford University Press.

Kühne, Thomas (Hg.) (1996) *Männergeschichte-Geschichteschichte: Männlichkeit im Wandel der Moderne*, New York Campus. (星乃治彦訳 1997 『男の歴史 市民社会と＜男らしさ＞の神話』 柏書房)

Saputro, Andi (2015) “Homosexual Identity Development as Reflected in E.M.Forster’s *Maurice*: a Psychological Study”, English Language and Literature Study Program, faculty of languages and Arts, Yogyakarta State University.

Sedgwick, E.K. (1985) *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, Columbia University Press.

Same sex orientation and the homosexual identity in *Männerbund*: A comparative study of two distinct types of male homoeroticism in Mishima Yukio's works and in E.M. Forster's *Maurice*

Junko Saeki
(Doshisha University)

Both Mishima Yukio's *Confessions of a Mask* and E. M. Forster's *Maurice* depict a male protagonist's search for his homosexual identity. In Mishima's novel, the male protagonist "I" attends a boy's boarding school and is attracted to Omi, a senior student of the same school. The protagonist of the eponymous *Maurice* also falls in love with Clive, one of his schoolmates in the English public school they attend, and their love is fostered throughout their school years. However, after the two graduate, Clive marries a woman and tells Maurice that their relationship merely represented an intimacy between friends and not a homosexual affiliation. In contrast, Maurice finally acknowledges that he is innately homosexual and makes love with Alec Scudder, Clive's gamekeeper. The love between Maurice and Alec transcends two major obstacles of their contemporary English society: the class difference and the intolerance of homoeroticism; these obstacles may have resulted in the work's late publication after the author's death.

Clive's sexual orientation is similar to the historical Japanese idea of *nanshoku*, a term denoting same sex love in pre-modern Japan. This concept is akin to the English notion of pederasty, as it was practiced in male homosocial circumstances (*Männerbund*), such as boarding schools for boys, and was compatible with the heterosexual marital relationship. A similar sexual orientation is depicted in Mishima Yukio's *Forbidden Colors*, where an old, famous novelist called Shunsuke marries three different women but, because of his hatred and discrimination against women, later becomes attracted to Yuichi, a young, beautiful man. Shunsuke's sexual orientation is categorized as *nanshoku* rather than the modern idea of homosexuality because it is not innate, unlike Yuichi's natural homoerotic orientation. Yuichi confesses that he has never felt any sexual desire for women and identifies himself as an innately gay man, as does Maurice.

Mishima and Forster both distinguish an inborn homosexual orientation and instances of temporal intimacy between male friends influenced by the male homo-social circumstances in their works. Both authors wrote about male homosexual desire in real terms from the point of view of each of their male protagonists. The messages of their works are still effective in communicating to contemporary readers and audiences an understanding of the inner suffering caused by and the struggle against the social intolerance of same sex love.

編集後記

2018（平成30）年度大学院国際日本学研究院主催の5回にわたる連続講演会が無事終了いたしました。多くの方々にご参加くださいましたこと、心からお礼申し上げます。そしてここに「東京外国語大学 国際日本学研究 報告Ⅶ」として、ご講演者各位から論文及び要旨の形でご寄稿いただき、冊子にまとめることができましたことを大変嬉しく存じます。

今年度の取組を振り返ってみますと、「国際日本学がめざすもの：その多面性と可能性」という大テーマが架空なものではなく、具体的なものとして国際日本研究の可能性を強く感じた次第です。今後も「国際日本研究」を発信し、推進していけるよう努力邁進していく所存でございます。皆様からのご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

大学院国際日本学研究院研究活動推進会議からワーキンググループとして以下のメンバーが、今年度の連続講演会の企画運営を担当いたしました。立ち上げから校正作業に至るまでご協力いただき有難うございました。

| | | |
|--------|-------------|------------|
| [教員] | 荒川洋平教授 | 菅長理恵教授 |
| | 友常勉教授 | 藤森弘子教授 |
| | セン・ラージ ラキ助教 | ポーター・ジョン講師 |
| | 幸松英恵講師 | |
| [事務局] | 成瀬智、滝澤未希子 | |
| [教務補佐] | 菊池直子、右崎有希 | |

大学院国際日本学研究院
研究活動推進会議代表
藤森弘子

東京外国語大学 国際日本学研究 報告Ⅶ

Print: ISSN 2432-5708
Online: ISSN 2433-9830

国際日本学がめざすもの：その多面性と可能性

発行：2019年3月31日

編集：東京外国語大学 大学院国際日本学研究院 研究活動推進会議編集部

発行者：東京外国語大学 大学院国際日本学研究院 研究院長 早津恵美子

〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1 アゴラ・グローバル2階 国際化拠点室

TEL 042-330-5534

FAX 042-330-5822

Email caas_admin@tufs.ac.jp

©Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Japan Studies



東京外国語大学 大学院
国際日本学研究院
Institute of Japan Studies,
Tokyo University of Foreign Studies